茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第34集

石　沢　館　跡

店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

令和３年８月

常陸大宮市教育委員会

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第34集　石沢館跡

令和3年8月　常陸大宮市教育委員会

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第34集

石沢館跡

店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

令和３年８月

常陸大宮市教育委員会

巻頭図版

調査区　全景（南上空から部垂城跡を望む）

石沢館跡　全景（北上空から南方を望む）

ごあいさつ

常陸大宮市は茨城県の北西部に位置し，県都水戸から約20㎞の，平成の大合併で誕生した人口約３万９千人の市です。

市域は，鷲子山塊の南端と関東平野周縁台地の北端の境界部にあたります。東部には久慈川，南西部には那珂川，中央部には緒川や玉川の清流が流れ，山間には美林が涵養されており，まさに山紫水明の地となっております。また，河川の流域や台地上には肥沃な田畑が広がり，大きな農業生産力の基盤となっております。

こうした豊かな自然に恵まれた常陸大宮市は，古くから人々の生活の場となり，多くの歴史を重ねております。そのため市域には，各時期の集落跡をはじめ，古墳・城館跡・塚など多くの遺跡が存在しているのです。

これらの遺跡は，私たちの祖先がどのように生活したのか，そして現在の豊かな生活の礎がいかに築かれてきたのかを知る手がかりになります。遺跡は，私たちが心豊かな生活をするうえで根源的かつ必要な情報を与えてくれていると言えます。このような貴重な文化遺産を後世に伝えることは，私たちの大切な使命であり，郷土の発展のためにも重要なことと考えております。

このたび発掘調査が行われた「石沢館跡」は，過去の調査では奈良・平安時代の住居跡や中世城館の堀等が発見されています。このことから，石沢台が「小場城」と大宮台地の東部にある「部垂城」・「宇留野城」・「前小屋館」の３城とを結ぶ交通の要所であった場所であると考えられています。

今回の調査は，令和２年（2020）12月14日から令和３年（2021）１月26日まで株式会社地域文化財研究所に委託して実施され，中世の掘立柱建物跡や方形竪穴遺構，溝等が発見されました。

本書は，この発掘調査の成果を報告するものです。歴史研究の学術資料としてはもとより，地域の教育・文化の向上のために十分に活用していただくことを希望いたします。また，この機会に文化財愛護の意識を一層高めていただければ幸いです。

最後になりますが，発掘調査にあたり多大なるご理解・ご協力をいただきました日榮産業株式会社　代表取締役　加森 正恒　様，ご指導いただきました茨城県教育庁文化課，全般にわたりご協力いただきました地権者様，地元の皆様，適正かつ慎重な調査をしていただいた株式会社地域文化財研究所様，その他ご指導・ご協力をいただいた関係各位に衷心より深く感謝申し上げます。

令和３年８月

茨城県常陸大宮市教育委員会
教 育 長　　茅根　正憲

例　言

1　本書は，店舗建設工事に伴い実施された石沢館跡（第１次）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は，日榮産業株式会社より委託を受けた株式会社地域文化財研究所が常陸大宮市教育委員会の指導の下に行った。

3　遺跡の所在地及び面積，調査期間，担当者などの調査体制は下記のとおりである。

所　在　地　　茨城県常陸大宮市石沢字梶内1685番，1686番1，1687番1，1687番3,

面　　積　　1,078.9㎡

調 査 期 間　　令和２年（2020）12月14日 ～ 令和３年（2021）１月26日

調査担当者　　間宮政光

調査参加者　　髙安丈夫　小坂部克己　萩野谷幸次　石山 匠　小野健治　澤畠恒則　関澤昌宏
寺門節子　寺門嘉津子　川﨑剛史　高久照美　北村 昶　柏 勝　須賀川照美
仲澤勝美　和田美帆　野村浩史　藤井陽子　増田香理　小林真千子

4　整理調査及び本書の作成は，株式会社地域文化財研究所において間宮政光が担当した。

5　執筆分担は，第１章第１節が吹野富美夫（常陸大宮市教育委員会），その他が間宮である。

6　調査記録及び出土品は，一括して常陸大宮市教育委員会が保管・管理している。

7　調査から本書の刊行に至るまで下記の方々にご協力を賜った。（敬称略・順不同）

笹沼光典　比毛君男　齋藤弘道　川口武彦　五十嵐雄大　吹野富美夫　中林香澄　萩野谷 悟
加森正恒　圷 健治　高安幸且
茨城県教育委員会　常陸大宮市教育委員会　日榮産業株式会社　有限会社エイ・シー建築計画室

凡　例

1　調査において使用した略号は次のとおりである。

石沢館跡・・・・・IIZ

掘立柱建物跡・・・・・SB　方形竪穴遺構・地下式坑・土坑・・・・・SK　溝・・・・・SD　ピット・・・・・SP

2　測量は世界測地系を用いた。遺構実測図中の方位は座標北を示し，断面図に記した数値は標高を示す。

3　遺構の計測は壁上端で行い，深さは検出面を基準としている。主軸方向は長軸線が座標北に対し何度偏針するかを記載した。土坑・ピットの平面形態について，方形及び円形基調の遺構では，長軸に対し短軸が８割以上を測るものを方形あるいは円形，８割未満を長方形あるいは楕円形としている。

4　色相は，農林水産省農林水産技術会議事務局他監修の『新版標準土色帖』に基づいた。

5　出土遺物観察表中の計測値は（ ）が復元値，〈 〉が残存値を示す。単位はcmである。

6　本文及び出土遺物観察表，写真図版中の遺構名は略号を用いている。

7　掲載遺物には，遺構ごとに番号が付されており，本文・挿図・図版共に一致している。

8　本書に用いた挿図縮尺及び網かけは次のとおりである。

縮　尺　　遺構・・・・掘立柱建物跡・溝 １:80　　方形竪穴遺構・地下式坑・土坑・ピット １:60
遺物・・・・１：３（一部に１：２・１：４を使用。図中に明記）

網かけ　　・・・・旧表土　・・・・攪乱　・・・・施釉範囲　・・・・須恵器（断面）

目　次

本文目次

ごあいさつ
例言
凡例
目次

第１章　調査経緯
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
　第３節　石沢館跡における考古学調査 …… 5
第３章　調査の成果
　第１節　遺跡の概要 …… 7
　第２節　基本堆積土層 …… 7
　第３節　遺構と遺物
　　第１項　掘立柱建物跡 …… 9
　　第２項　方形竪穴遺構 …… 11
　　第３項　地下式坑 …… 14
　　第４項　溝 …… 15
　　第５項　土坑 …… 17
　　第６項　ピット …… 24
　　第７項　遺構外出土遺物 …… 26
第４章　総括
　第１節　遺跡の時期と土地利用の変遷 …… 29
　第２節　調査区の性格 …… 31

写真図版
抄録

挿図目次

第１図　遺跡周辺の旧地形 …… 2
第２図　調査区設定図 …… 2
第３図　石沢館跡の位置と周辺の遺跡 …… 4
第４図　調査区位置図 …… 4
第５図　調査区全体図 …… 6
第６図　基本堆積土層 …… 7
第７図　SB01 …… 8
第８図　SB01出土遺物 …… 9
第９図　SB02，出土遺物 …… 10
第10図　SK01･02，SK01出土遺物 …… 11
第11図　SK03･06･09･10･11･37，SK03出土遺物 …… 12
第12図　SK10･37出土遺物 …… 13
第13図　SK16･17，出土遺物 …… 14
第14図　SD01 …… 15
第15図　SD01出土遺物 …… 16
第16図　SK04･05･07･27，SK04出土遺物 …… 17
第17図　SK08･12･13･14･15･18･19･29 …… 19
第18図　SK20･21･22･23･38，SK23出土遺物 …… 20
第19図　SK24･25･26･28 …… 21
第20図　SK30･31･32･33･34･35･36･39･40･41･42･43 …… 23
第21図　SP01～13･18～39 …… 25
第22図　遺構外出土遺物 …… 26
第23図　遺構変遷図 …… 30

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧 …… 4
第２表　SB01ピット計測表 …… 9
第３表　SB02ピット計測表 …… 10
第４表　ピット一覧表 …… 26
第５表　出土遺物観察表（１） …… 27
第６表　出土遺物観察表（２） …… 28
第７表　出土遺物集計表 …… 28

写真図版目次

巻頭図版　調査区全景　石沢館跡全景
図版１　調査区全景　同全景　同調査前現況　TP01基本堆積土層　TP02基本堆積土層
図版２　SB01全景　同全景　同Ｐ１土層断面　同Ｐ８土層断面　同P14土層断面
図版３　SB02全景　同全景　同Ｐ１土層断面　同Ｐ３近景　SK01全景　同遺物出土近景　SK02･28全景　SK03全景
図版４　SK03遺物出土近景　SK06全景　SK09全景　SK10･11全景　SK37全景　SK16全景　同土層断面　SK17･30全景
図版５　SD01全景　同土層断面　同石製品出土状況　SK04･05･27全景　SK07全景　SK08全景　同土層断面
図版６　SK12全景　SK13全景　同土層断面　SK14全景　SK15全景　同土層断面　SK18全景　SK19･29全景
図版７　SK17･20全景　SK21全景　SK22全景　SK23･38全景　SK23遺物出土近景　SK24全景　SK25全景　SK26全景
図版８　SK31全景　SK32全景　SK33全景　SK34全景　同土層断面　SK35全景　SK36全景　SK39･41全景
図版９　SK40全景　SK42全景　SK43全景　SP01～08全景　SP09～11･13･28～31全景　SP24～33･36全景　SP09･10土層断面　SP31土層断面
図版10　出土遺物

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は，店舗建設工事に伴う事前調査である。

令和２年６月８日，日榮産業株式会社代表取締役加森正恒から常陸大宮市教育委員会に同工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会がなされた。同工事予定地は，周知の埋蔵文化財包蔵地石沢館跡地内であるため，同日付けで文化財保護法第93条第１項の規定により埋蔵文化財発掘の届出の提出を受けた。

令和２年７月15日及び16日の２日間にわたり常陸大宮市教育委員会は試掘調査を実施した。試掘調査は，トレンチ方式で行い，調査の結果，中世の溝，土坑及びピット等が確認され，中世城館跡の所在が判明した。試掘調査の結果により日榮産業株式会社と常陸大宮市教育委員会が協議を行ったところ，店舗建設工事の必要性により計画変更が困難なことから，工事着手前に記録保存のための発掘調査を実施することの合意が得られた。埋蔵文化財発掘の届出については，その協議結果に基づいて常陸大宮市教育委員会から茨城県教育委員会へ進達した。

令和２年９月18日，茨城県教育委員会から発掘調査を実施する旨の通知を受けた。

発掘調査はこの通知を受けて，日榮産業株式会社と常陸大宮市教育委員会の協議により民間発掘調査組織に委託することになり，株式会社地域文化財研究所が選定された。日榮産業株式会社，常陸大宮市教育委員会及び株式会社地域文化財研究所は，令和２年10月30日付けで埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を締結し，株式会社地域文化財研究所が令和２年12月14日から令和３年１月26日まで本発掘調査を実施した。

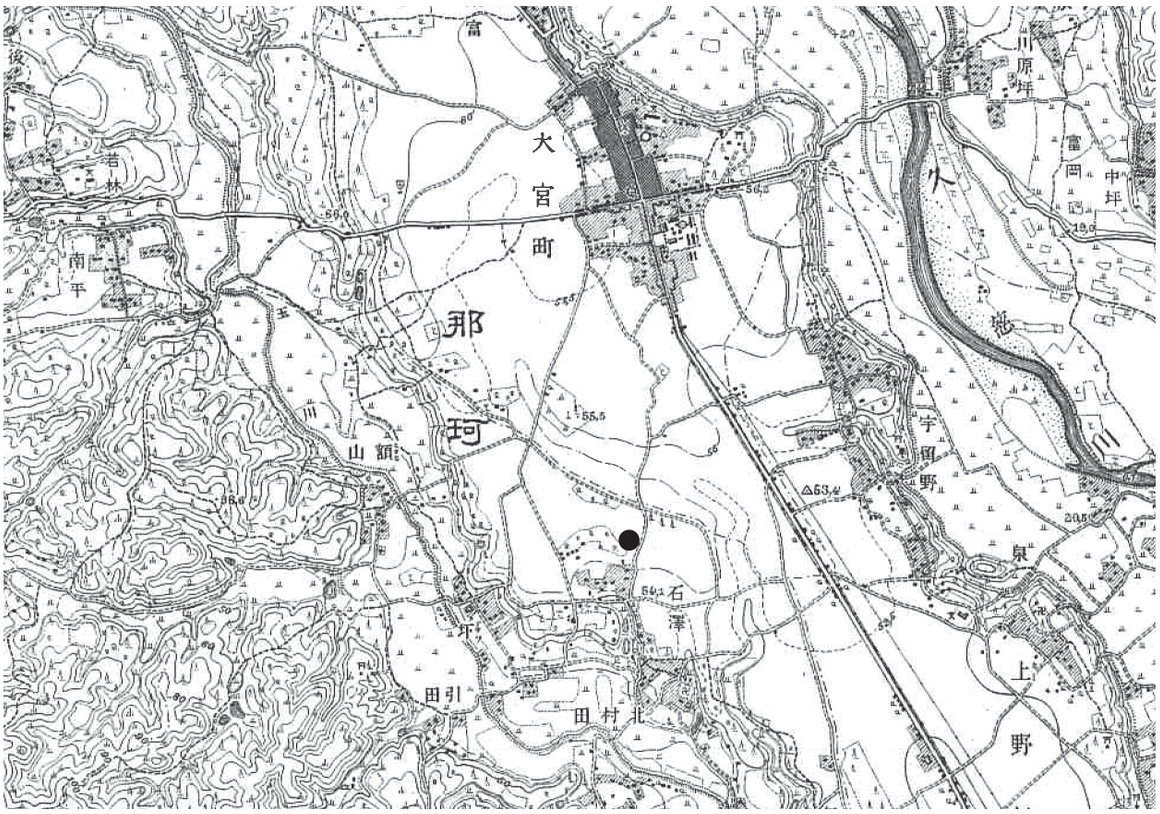
第２節　調査経過

本調査は，遺構検出面に掘削が及ぶ建物本体部分と広告塔部分の二箇所において実施した。

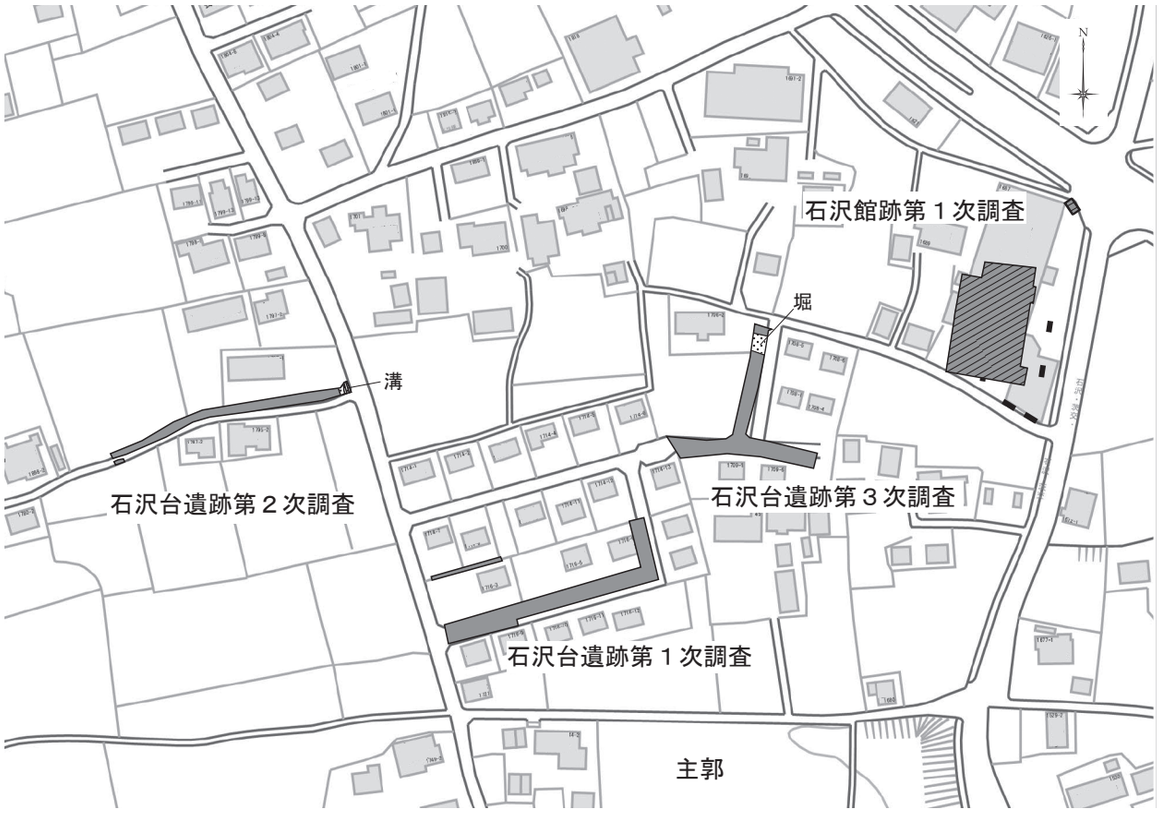
現地調査は，表土除去，遺構確認，遺構掘り下げの順で各段階を記録し，広告塔部分から建物本体部分へと進めた。また，調査区には，世界測地系の座標を用いて５ｍ×５ｍのグリッドを設定し，調査の基準にしている。遺構の掘り下げは，堆積土層を把握する観察用ベルトを設け，新しいものより着手した。掘立柱建物跡及びピットは柱痕確認により構造の把握とその記録に努めた。記録は25㎝間隔の等高線による１:100縮尺の全体図，各遺構は１:20縮尺の平･断面図を作成，写真撮影にはデジタルカメラを用いている。なお，遺跡の公開については，現地説明会を計画していたが，茨城県の新型コロナウイルス感染症拡大防止のための緊急事態宣言を受けて取りやめ，随時見学者を受け入れることでこれに代えた。

整理調査は，現地調査により得られた出土品及び記録類を対象に実施した。出土品は収納箱１箱分で細片に至るまで水洗し，注記後の接合を経て分類･集計した。掲載遺物は実測，トレース，全量の写真撮影，遺構図面は第２原図に修正を行い，トレース，編集へと進め，調査資料を分析して報告書にまとめた。

以下は現地調査の日誌抄である。調査は12月14日から開始する。現況写真撮影後，重機を用いて表土除去に着手した。16日，安全対策を講じ広告塔部分を調査するが，遺構は認められず記録して埋め戻す。21日，調査環境の整備と建物本体部分の遺構確認を行う。22日，表土除去・遺構確認終了。調査区北西部と南東部に遺構の偏在が認められた。調査区西壁で基本堆積土層を把握する。23日，溝及び新しい遺構から掘り下げる。24日，テストピット掘削。25日，安全対策を強化して年内の調査を終える。１月６日，調査再開。７日，地下式坑が検出される。15日，掘立柱建物跡とピット中心の調査になる。21日，実測と併行しながら空撮の準備を開始。26日，空撮。その後，事業主，地権者立ち会いのもと常陸大宮市教育委員会の確認を受け現地調査を終了する。27日より埋め戻しを開始し２月１日に完了した。



第１図　遺跡周辺の旧地形（S=1:25,000 大正４年測図）　● 調査区の位置



第２図　調査区設定図（S=1:2,500）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

石沢館跡の所在する常陸大宮市は，茨城県の北西部に位置し，地形的には鷲子山塊の南端と関東平野周縁台地との境界にあたる。

石沢館跡は，久慈川と玉川に挟まれ南北に延びる通称大宮台地の西部で，玉川へ向け開口する小支谷により侵食を受け，複雑に形造られた台地先端を利用して築かれている。

遺跡は，奈良・平安時代の集落跡や中・近世の遺構群が検出された石沢台遺跡と重複し，調査区は石沢館跡の北東端部で，大宮バイパス石沢交差点の南西隣地にある。現況は店舗跡地のため平坦な地形となり，標高は54.3mを計測する。

第２節　歴史的環境

茨城県を代表する大河の那珂川や久慈川を臨む常陸大宮市域は，人類の生活には適していたようで，350箇所を超える遺跡が確認される。近年では，弥生時代中期前葉の再葬墓として知られる泉坂下遺跡が国指定史跡になり，出土した人面付壺形土器は重要文化財に指定されるなど耳目を集めた。

ここでは，本調査の主たる時期の中世に限定して，歴史的環境を概観してみたい。

平安時代の末期になると，律令的な郡郷制は解体し円滑には機能しなくなる。それに伴い郡域を分割・再編する形で武士団の成立をみるが，当地において歴史の表舞台に登場するのは河内源氏系氏族の佐竹氏であり，12世紀末頃までには那珂川以北一帯に勢力を扶植したと考えられている。しかし，源平の争乱のなかで，常陸国奥七郡（多珂・久慈東・久慈西・佐都東・佐都西・那珂東・那珂西）を手中に収め『吾妻鏡』に「権威境界外に及び，郎従国中に満つ」と記された佐竹氏も，源頼朝政権に不参であったため征討を受け，奥七郡の支配体制は一旦崩壊する。この後佐竹氏は頼朝に従うものの鎌倉時代を通して雌伏の時を過ごす。中世前期の遺跡としては，佐竹氏没落後の久慈東郡加志村の地頭になった二階堂加志村氏の居館が市内富岡の道利山にあったとされるが，現在市域において鎌倉時代に遡る遺跡は発掘されていない。

南北朝の内乱期に入ると佐竹氏は足利氏方として活動し，久慈西郡の瓜連城（那珂市）などで戦闘を繰り広げ，常陸守護職に補任されるまで勢力を回復する。この頃の注目される遺跡としては，北畠親房の発給文書などに登場する白河と常陸を結ぶ依上道が挙げられる。那珂市下大賀遺跡では13世紀～17世紀に比定される側溝を伴う幅５～６ｍの中世道が発掘され，依上道の可能性が指摘されている。未だ常陸大宮市域では検出できないが，依上道は，久慈川をはじめとした河川交通と共に経済的な大道になるもので，物流や交通などの経済面から当地を理解するうえでも重要な遺構である。

中世の後半に至ると当地には佐竹氏の支配が及ぶことになる。やがて久慈川や那珂川の流域は山入一揆（佐竹の乱）や部垂の乱など内乱の渦中となり，これを克服した佐竹氏は戦国大名へと成長していく。一方，戦国時代の市域には部垂氏を中心に，高部氏などの佐竹一族が所領を持ち地名を苗字とする。佐竹一族の配置はこの地域が下野との国境で，那須氏や宇都宮氏との勢力圏の境界によるものであり，これらの状況を反映するかのように80箇所を上回る城郭が残されている。考古学調査が実施された城館関連遺跡を列挙すると，那賀城跡では掘立柱建物跡が，山方城跡では主郭の一部が発掘され，渡来銭，土師質土器皿，一字一石経に類する墨書土器が出土し，当時の精神生活が垣間みられた。また，石沢館跡北東の上宿上坪遺跡からは溝と土坑が検出され，古瀬戸の平碗，茶壺，志戸呂の擂鉢，常滑製品など15世紀代の遺物が出土した。溝に区画された方形竪穴遺構，土坑，井戸が調査された上ノ宿遺跡と共に，南東側に展開する宇留野城跡との関係が示唆されている。さらに，約６㎞西方の赤岩遺跡では，15世紀後半の空堀が発掘された。

第３図　石沢館跡の位置と周辺の遺跡（S=1:25,000 『茨城県遺跡地図』に加筆作成）

第１表　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
1	石沢館跡						○	○
2	石沢台遺跡		○			○	○	○
3	石沢ホリ内遺跡		○	○		○		
4	栄町羽金堂遺跡		○			○		
5	六丁遺跡					○		
6	大塚遺跡		○			○		
7	上高作遺跡		○			○		
8	額山A遺跡					○		
9	額山B遺跡		○			○		
10	熊の石遺跡					○		
11	引田前遺跡					○		
12	大宮自然公園遺跡		○			○		
13	小中遺跡					○		
14	北村田遺跡		○			○	○	
15	後三ケ尻B遺跡		○			○	○	
16	後三ケ尻A遺跡					○		
17	萱峯遺跡		○		○	○		
18	前三ケ尻B遺跡					○		
19	前三ケ尻A遺跡		○			○		
20	北村田B遺跡					○	○	
21	上村田江ノ上遺跡				○	○		
22	坪井上遺跡		○	○	○	○		

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
23	上岩瀬富士山遺跡			○	○	○		
24	根本向井坪遺跡				○	○		○
25	根本古墳群				○			
26	根本遺跡					○		
27	根本後坪遺跡					○		
28	泉坂下遺跡		○	○	○	○	○	
29	春日神社前遺跡				○	○		
30	前小屋館跡					○	○	
31	駄木所遺跡					○		
32	宇留野城跡						○	
33	仲下遺跡		○		○	○	○	
34	上宿上坪遺跡		○		○	○	○	
35	上ノ宿遺跡		○			○	○	
36	宮中遺跡		○			○		
37	松吟寺古墳群				○			
38	松吟寺遺跡		○			○	○	
39	部垂城跡						○	
40	中富遺跡		○			○		
41	大宮洞目気遺跡		○			○	○	○
42	見渡遺跡					○	○	
43	抽ヶ台古墳				○			
44	抽ケ台遺跡				○	○		

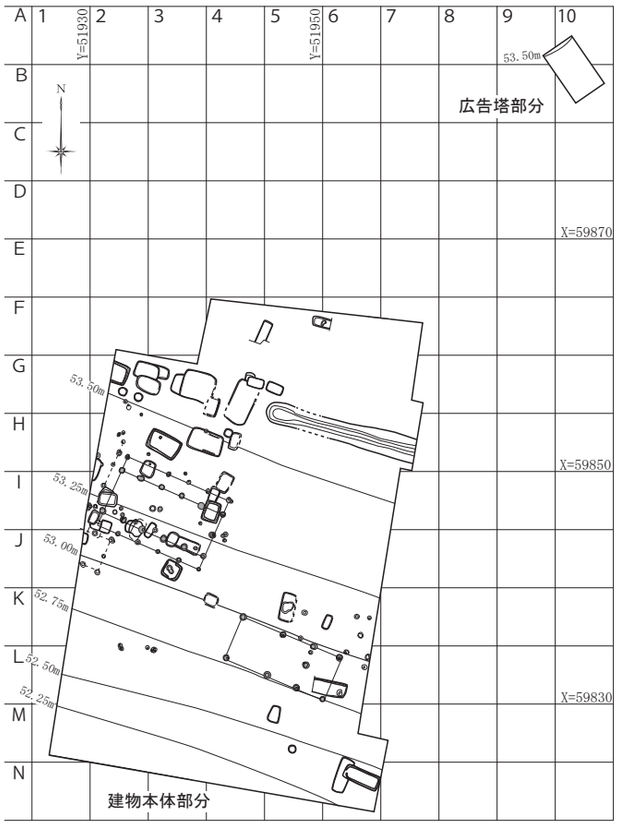
遺跡の一角からは昭和58年に「三美の蓄銭」といわれる埋蔵銭が発見されており，当地には有徳人などの経済的優位者がいて，屋敷の普請を物語る「長者と牛石」の伝説が残され，これと関わる館が営まれたのではないかと考えられている。この他集落跡としては，石沢館跡の北約６㎞に位置する北原遺跡で地下式坑や方形竪穴遺構が，中間にあたる鷹巣原遺跡や鷹巣戸内遺跡で掘立柱建物跡が調査され，鷹巣原遺跡では渡来銭を伴う地鎮の痕跡が認められている。ただし時期の特定はなされていない。

このように考古学調査の蓄積も十分とはいえないまでもみられるようになり，近年では，常陸大宮市歴史民俗資料館と茨城大学中世史研究会が共同して城館跡の現況調査を行い，市域における中世史の探究も新たな展開をみせはじめている。

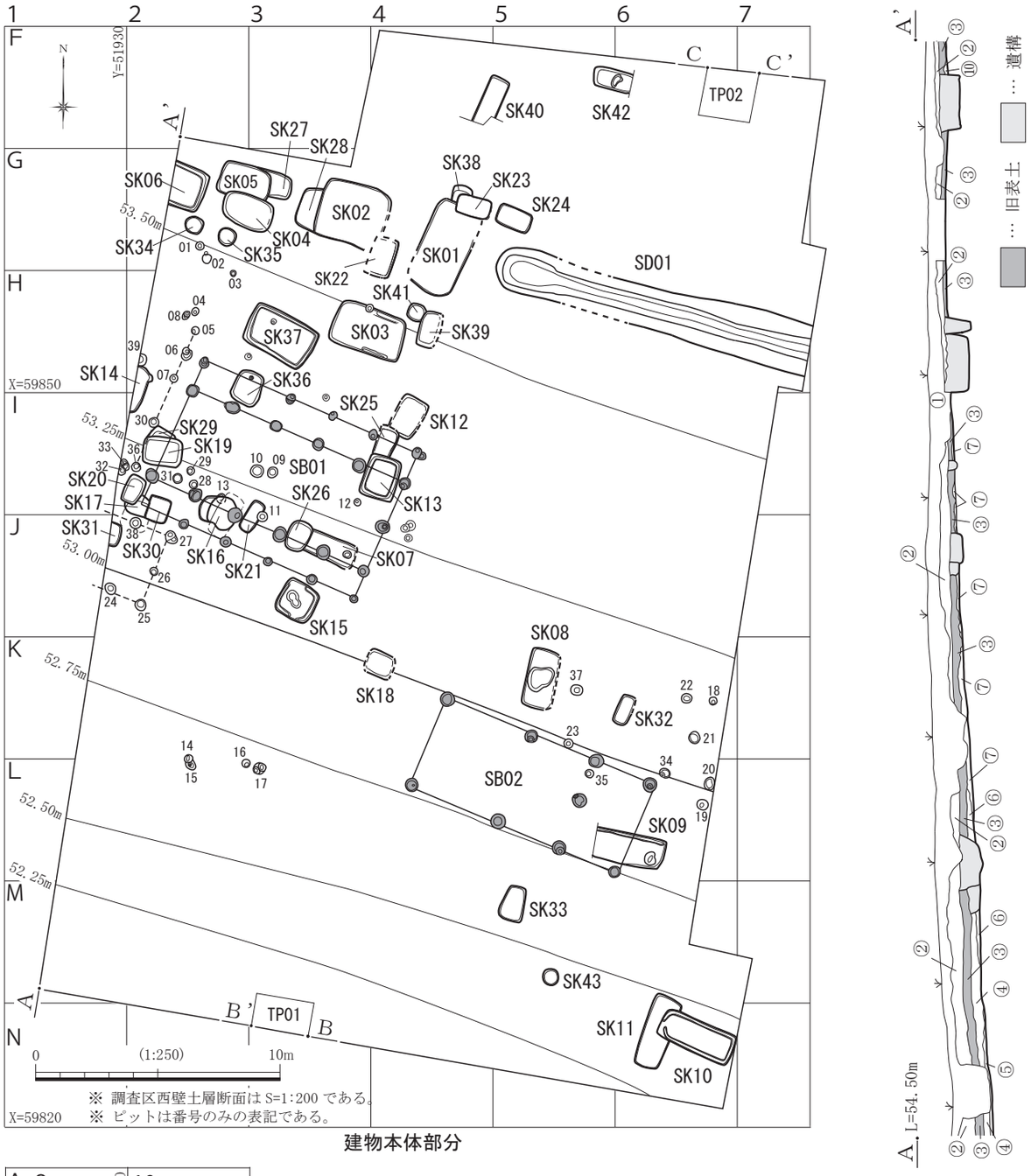
第３節　石沢館跡における考古学調査

石沢館跡は，平成28年に行われた石沢台遺跡第３次調査において，15世紀代の幅約2.8m，深さ約1.4mの空堀が発見され，中世城館遺跡として登録されることになったが，昭和38年には常陸太田市出身の郷土史家，川崎春二氏によりすでに踏査されており，石沢館址として「常陸奥七郡城館図」に収録されている。近年では，五十嵐雄大氏を中心に新たな踏査が行われ，佐竹家臣団の部垂衆に属した石沢氏の館跡で，北方に東へ向け連なる部垂城，宇留野城，前小屋館に近く，東側を南方の小場城方面へ抜ける街道が通っていたことから，小場・部垂間の関所城の役割を果たしたものと考えられている（『続 図説 茨城の城郭』）。なお，石沢館跡の主郭は本調査区の南約210mに位置する侵食谷に囲まれた台地上に想定されている。

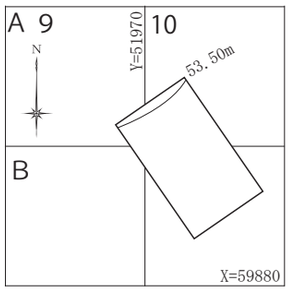
石沢館跡の範囲は南北に細長く，北西部を石沢台遺跡と重複する。石沢館跡の発掘調査は今回を初回とするが，本調査区の西で実施された三次に及ぶ石沢台遺跡の発掘では，中・近世に帰属する遺構・遺物が検出された。第１次調査では井戸跡・粘土貼りを含む土坑・溝・ピット，第２次調査では方形竪穴・地下式坑・土坑・溝・ピット，第３次調査では前述の堀の他，掘立柱建物跡・柵列・井戸跡・粘土貼りを含む土坑・溝・ピットが発見された。全体をみると遺構の密度は高く，集落や墓域の存在が指摘されている。これら検出された全ての遺構が石沢館跡と関わるものではないが，中世後半から近世へかけての営みはうかがわれ，本遺跡が当地において中心的な場であったことを暗示している。



第４図　調査区位置図（S=1:600）



建物本体部分



広告塔部分

基本堆積土層 土層説明

① 客土　　砕石・基礎。締まり強,粘性弱。
② 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒・橙色粒少量含む。締まり・粘性弱。耕作土。
③ 黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒・橙色ブロックφ1～2cm少量含む。締まり・粘性弱。旧表土。
④ 黒褐色土 7.5YR3/1 ローム粒・白色粒少量,橙色粒微量含む。締まり・粘性弱。
⑤ 褐灰色土 7.5YR4/1 白色粒多量,橙色粒中量含む。締まり・粘性有。
⑥ 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒多量,橙色粒少量含む。締まり有,粘性弱。
⑦ 暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒中量,橙色粒少量含む。締まり有,粘性弱。
⑧ 褐灰色土 7.5YR4/1 白色粒密に含む。締まり強,粘性有。
⑨ 橙色土　5YR6/6　白色粒密に含む。締まり強,粘性有。
⑩ 橙色土　5YR6/6　白色粒多量含む。締まり強,粘性有。今市軽石層。

第５図　調査区全体図

第３章　調査の成果

第１節　遺跡の概要

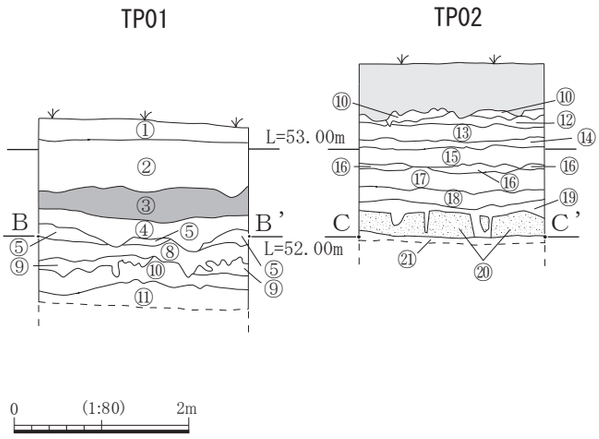
本調査は建物本体部分と広告塔部分の二箇所に調査区を設定して臨み，中・近世に帰属する掘立柱建物跡２棟，方形竪穴遺構８基，地下式坑２基，溝１条，土坑33基，ピット39基が検出された。ピットは調査区外へも分布しており，複雑な状況で，掘立柱建物跡への付属，あるいは柵列を構成する柱穴の可能性もある。一方，方形竪穴遺構は長軸が2.5m以上計測する大型の方形遺構をあてた。これら遺構の底面は硬化しておらず，ローム粒やロームブロックを顕著に含み人為的に埋め戻されていた。なお，遺構番号は付していないものの，調査区西壁の土層観察では西側の調査区外に主体を持つ掘り込みが認められている。

遺物は82点と少ない。時期・種別が明確なものでは，弥生時代中期末～後期初頭の広口壺を最古に，弥生後期土器（壺・甕類），奈良・平安時代を中心とした古代の土師器（坏・甕），須恵器（坏・甕），中・近世陶器（古瀬戸祖母懐茶壺，瀬戸・美濃天目茶碗・輪禿皿・志野皿・灰釉碗），磁器（肥前系染付碗），土師質土器（皿・鍋・壺・擂鉢），石製品（砥石），鉄製品（釘），自然礫が得られている。自然礫には玉川石と呼ばれるメノウの石核・礫片が含まれ，火打石の存在を想起するも時期・用途は不明であった。

第２節　基本堆積土層

調査は，南東より入り込む侵食谷の谷頭部において実施された。調査区には店舗が営まれていたため平坦にみえるものの，旧地形は南の小支谷へ向け傾斜していることが明らかになった。今市軽石層を基準とした比高は約1.8mである。また，調査地は建物の基礎と耕作により著しく攪乱されていた。

基本堆積土層は，建物本体部分の調査区西壁と，TP01で現地表から2.2m，TP02で2.1mを記録したものである。最上層の①層は店舗解体時の客土で，②層は耕作土である。12～60㎝の層厚があり，③層は旧表土と判断したが，上部は侵食されている。⑦層は漸移層であり，⑩層の橙色土層が今市軽石層にあたる。これより上層及び遺構覆土中には橙色粒（今市軽石）を含有し，以下田原ローム層，宝木ローム層へと続くが，南の小支谷中に設定したTP01では水の影響とみられる鉄分を含んだ灰白色の強粘質土が堆積する。一方，TP02は台地上の堆積を示しており，⑰層は第２黒色帯にあたる。⑲層は締まり粘性共に強い褐灰色土で多量の鹿沼軽石を含む。⑳層は鹿沼軽石層（Ag-KP）となり，強粘質土の灰褐色土層へと至る。

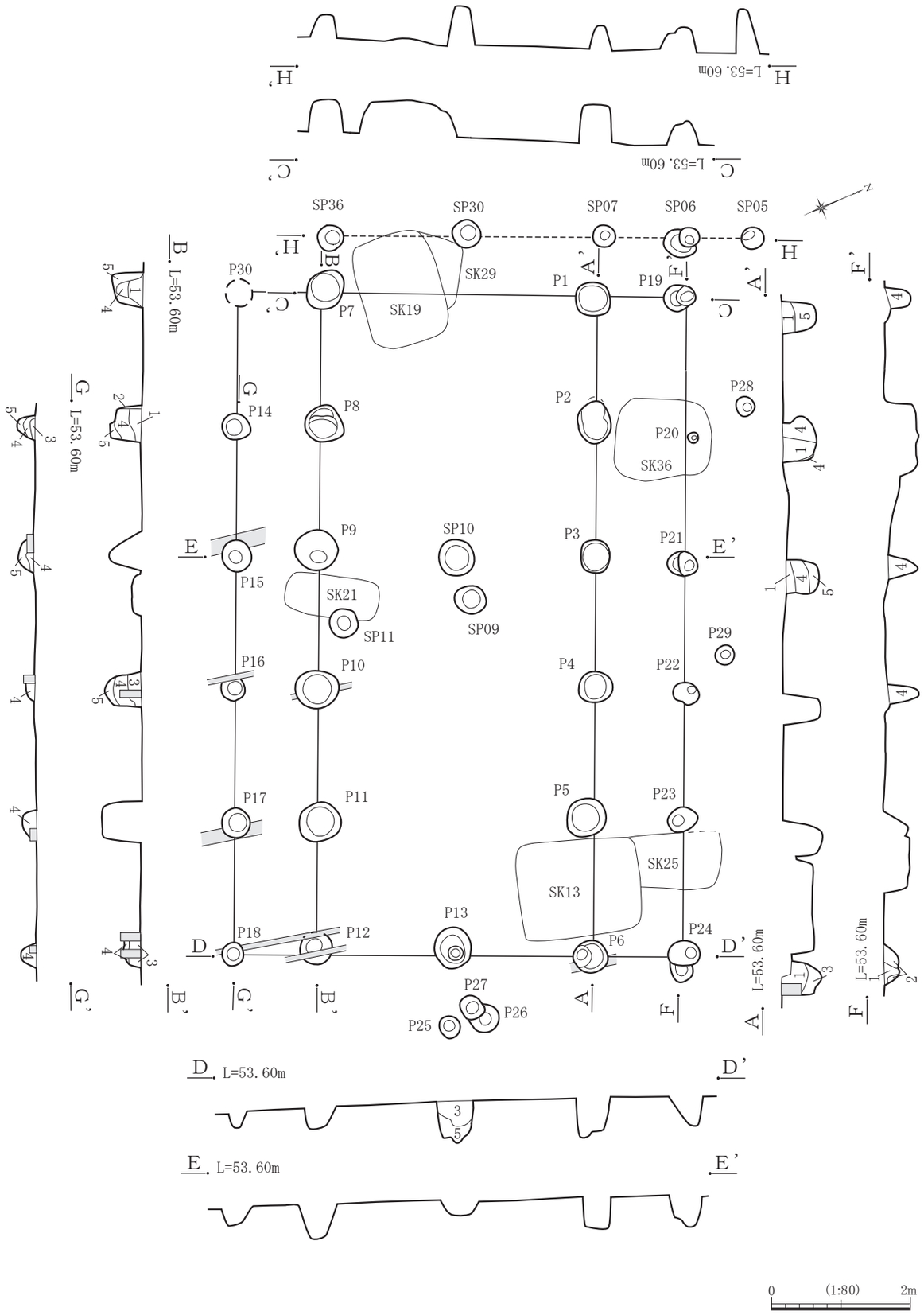


基本堆積土層　土層説明

⑧ 褐灰色土 7.5YR4/1 白色粒密に含む。締まり強，粘性有。
⑨ 橙色土 5YR6/6 白色粒密に含む。締まり強，粘性有。
⑩ 橙色土 5YR6/6 白色粒多量含む。締まり強，粘性有。今市軽石層。
⑪ 灰白色土 7.5YR8/1 鉄分含む。締まり・粘性強。強粘質土。
⑫ 明褐色土 7.5YR5/8 白色粒中量含む。締まり・粘性有。ソフトローム層。
⑬ 明褐色土 7.5YR5/6 白色粒中量含む。締まり強，粘性有。ハードローム層。
⑭ 明褐色土 7.5YR5/6 白色粒・黒色粒中量含む。締まり強，粘性有。
⑮ 明褐色土 7.5YR5/6 白色粒・黒色粒・赤褐色粒少量含む。締まり強，粘性有。
⑯ 明褐色土 7.5YR5/6 白色粒・黒色粒多量含む。締まり強，粘性有。
⑰ 褐色土 7.5YR4/6 白色粒多量，黒色粒中量含む。締まり強，粘性有。第２黒色帯。
⑱ 明褐色土 7.5YR5/6 白色粒多量，黒色粒中量，赤褐色粒少量含む。締まり強，粘性有。
⑲ 褐灰色土 7.5YR4/1 鹿沼軽石・白色粒多量含む。締まり・粘性強。
⑳ 黄橙色土 7.5YR8/8 締まり・粘性強。鹿沼軽石層。
㉑ 灰褐色土 7.5YR4/2 白色粒・黒色粒少量含む。締まり・粘性強。強粘質土。

※ ①～⑦は第５図参照。

第６図　基本堆積土層


SP05
SP06
SP07
SP30
SP36
SK29
SK19
P1
P19
P7
P30
P28
P2
P20
SK36
P14
P8
P9
SP10
P3
P21
P15
SK21
SP11
SP09
P29
P16
P10
P4
P22
P17
P11
P5
P23
SK25
SK13
P13
P18
P12
P6
P24
P27
P26
P25
H
H'
C
C'
A
A'
F
F'
B
B'
G
G'
E
E'
D
D'
L=53.60m
L=53.60m
L=53.60m
L=53.60m
L=53.60m
L=53.60m
L=53.60m
0
(1:80)
2m

第７図　SB01

第３節　遺構と遺物

第１項　掘立柱建物跡

SB01（第７・８図，第２・５表，写真図版２・10）

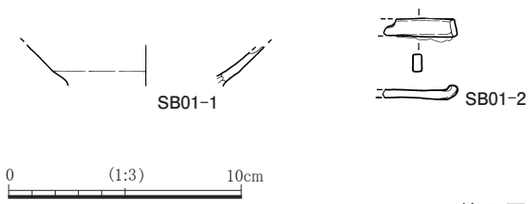
調査区西部，Ｈ－2，Ｉ－２・３・4，Ｊ－２・３・４グリッドに位置する。周辺には多くのピットが検出されており，本跡に付属するものや新たな遺構を示す可能性もある。地下式坑のSK16・17，土坑のSK07・13・19・21・25・26・29・30・36と重複し，本跡はSK30・36より古く他よりも新しい。ただ，SK13・19・21・25・29との新旧関係は不明である。規格は廂付掘立柱建物跡で，身舎・廂共に直線上に並び，桁行５間，梁行２間の東西棟と判断した。規模は身舎の桁行長9.60m（約32尺），梁行長3.90m（約13尺）を測り，北側に1.40m，南側に1.30mの廂を伴う。建物の傾きはＮ－65°－Ｗを示す。身舎柱は13本で構成され，西側梁行中央の妻柱は検出されていない。このことから単独ピットとして扱ったSP06・07・30・36は，本跡の西側梁行や庇を構成する可能性もある。ただ，SB01とするならば桁行の柱間寸法が0.8mと後述する柱間寸法と比べ明らかに狭いことから本跡に伴うと判断しなかった。あるいは単独ピットのSP05を加えて柵列が存在したとの見方もできる（本節第６項参照。第７・21図）。また，SP09・10は建物跡の中央に位置し，掘り込みは浅く地鎮など祭儀行為の痕跡かもしれない。身舎の柱掘り方の平面は円形を基調としてしっかりとした構築である。これに対して北と南側に検出された10本は，規模がやや小さく掘り込み深度も浅いなど廂と判断した。P20・30は土坑等の構築により失われている。なお，P25～P29は廂と類似した覆土であることからSB01に伴う柱穴としたものである。各柱掘り方の規模は第２表にまとめた。身舎柱は長軸0.50～0.65m，短軸0.45～0.55m，深さは南へ向け傾斜するため0.36～0.62m，廂は長軸0.38～0.48m，短軸0.31～0.43mに集中し，深さは0.18～0.53mである。柱間寸法は1.90mの等間隔に配置されている。埋土はローム粒を含有した黒褐色土を主体としており，下層にはロームブロックの含有が顕著である。締まりはあるものの硬化までは至らず，底面に硬化は認められない。遺物はＰ１の底面より15世紀後半とみられる土師質土器皿，鉄製品の不明品，メノウの礫片，Ｐ３・４より奈良・平安時代の土師器甕が出土している。時期は重複関係と１点ではあるがＰ１より出土した土師質土器皿を重視し，15世紀後半に位置付けたい。

第２表　SB01 ピット計測表

№.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15
長軸	48	66	45	50	55	50	62	60	57	62	62	48	58	42	48
短軸	48	46	42	45	50	48	50	55	54	50	55	〈30〉	54	40	43
深さ	56	53	47	56	57	57	46	52	54	56	55	36	62	30	28

№.	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30
長計	35	43	35	45	16	42	38	46	60	32	46	36	28	46	—
短計	〈20〉	42	32	40	15	35	31	35	48	30	35	33	28	27	—
深さ	18	28	24	38	51	44	53	42	42	29	37	36	29	46	—

〈 〉は残存値　単位＝cm

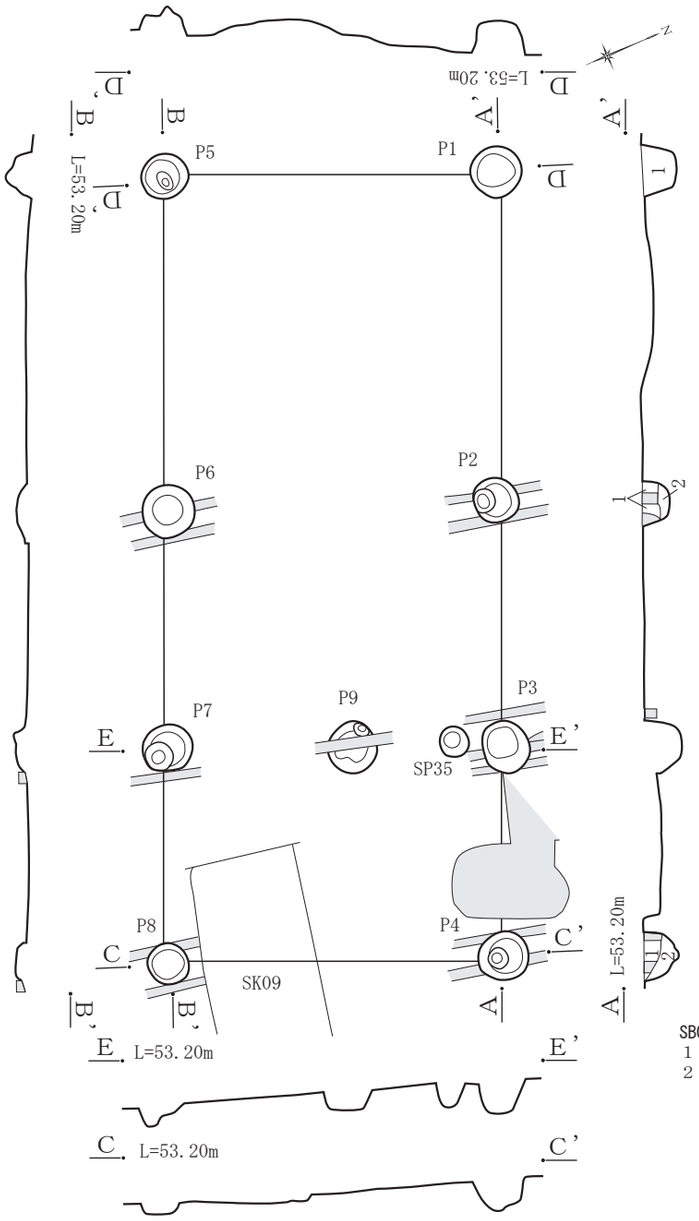


SB01 土層説明
1　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒多量，橙色粒少量含む。締まり有，粘性弱。
2　明黄褐色土　10YR6/6　締まり・粘性強。
3　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒少量含む。締まり・粘性弱。
4　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒・ロームブロックφ1～5cm密に含む。締まり・粘性有。
5　黒褐色土　10YR3/2　ローム粒・ロームブロックφ1～3cm多量含む。締まり・粘性有。

第８図　SB01 出土遺物

SB02（第９図，第３・５表，写真図版３・10）

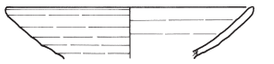
調査区東部，Ｋ－４・5，Ｌ－４・５・６グリッドに位置する。方形竪穴遺構のSK09と重複し本跡が古い。規格は側柱掘立柱建物跡で，柱掘り方は直線上に並び，桁行３間，梁行１間の東西棟である。規模は桁行長9.00m（約30尺），梁行長3.80m（約13尺）を測り，建物の傾きはＮ－67°－Ｗを示す。柱掘り方は８本で構成されるものの，Ｐ９も伴う可能性が高い。柱掘り方の平面は円形を基調とする。各柱掘り方の規模は第３表にまとめた。長軸0.60m前後，短軸0.55m前後，深さは南へ向け傾斜するため北と南の側柱では相違し0.12～0.43mを計測する。柱間寸法は，Ｐ１～２・５～６間は3.80m，Ｐ２～３・６～７間は2.70m，Ｐ３～４・７～８間は2.50mとなる。埋土はローム粒を含有した黒褐色土を主体としており，下層にはロームブロックの含有が顕著である。各柱穴の覆土は締まりはあるものの硬化までは至らず，底面に上部荷重を示す硬化は認められない。中・近世の遺物はＰ２より砥石，Ｐ４より土師質土器の皿が出土している。時期は遺物から17世紀前葉と判断した。

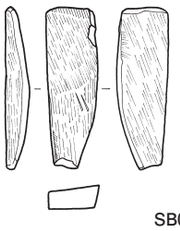


第３表　SB02 ピット計測表

No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
長軸	60	51	60	58	55	61	58	48	60
短軸	60	50	55	55	50	60	55	45	54
深さ	41	36	42	39	34	17	26	12	43

単位＝cm





SB02 土層説明
1　黒褐色土 10YR3/2　ローム粒中量含む。締まり有，粘性弱。
2　黒褐色土 10YR3/2　ローム粒・ロームブロック φ1～2cm 密に含む。締まり有，粘性弱。

0　(1:80)　2m
0　(1:3)　10cm

第９図　SB02，出土遺物

第２項　方形竪穴遺構

SK01（第10図，第５表，写真図版３・10）

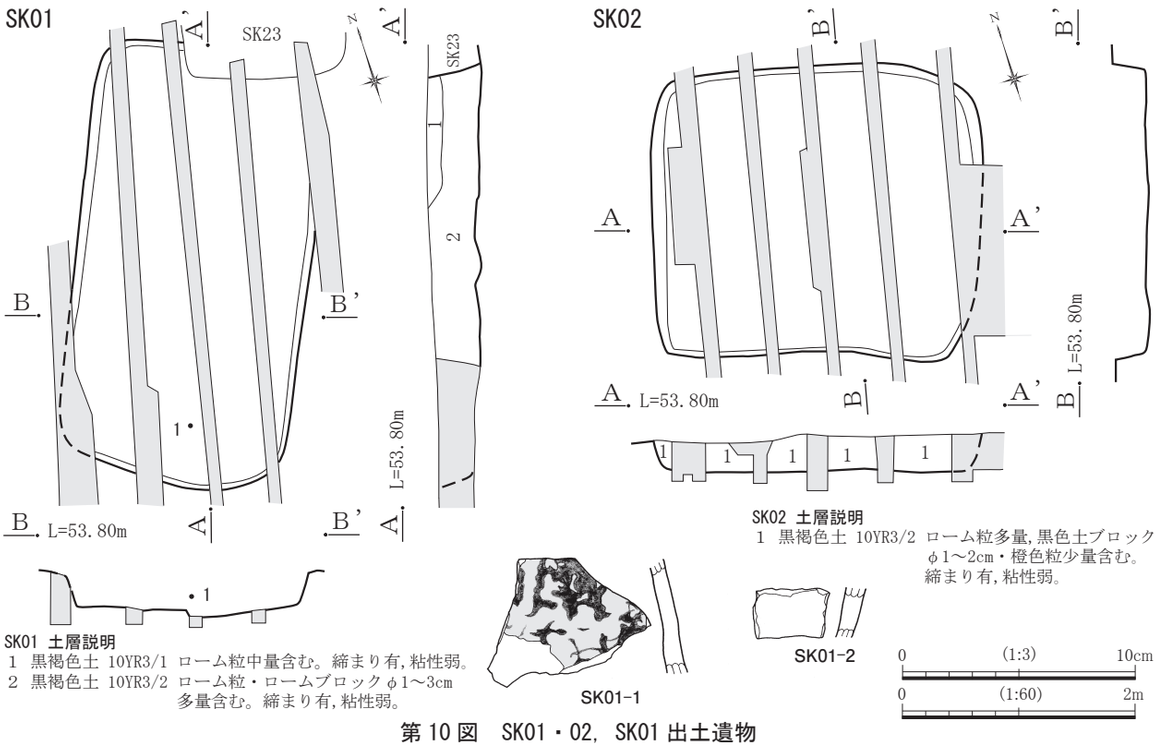
調査区北部，Ｇ・Ｈ－４グリッドに位置する。耕作で壊される。SK23・38と重複し，本跡はSK23より古くSK38よりも新しい。平面は長方形。規模は長軸を南北にとり3.80m，短軸2.00m，深さ0.46mを測る。主軸方向はＮ－24°－Ｅを示す。底面は起伏はあるもののほぼ平坦で，壁は垂直に立ち上がる。覆土はローム粒・ロームブロックを顕著に含む黒褐色土を主体にした人為堆積である。中・近世の遺物は，中層より古瀬戸の祖母懐茶壺と土師質土器の鍋が出土している。時期は遺物から15世紀後半である。

SK02（第10図，写真図版３）

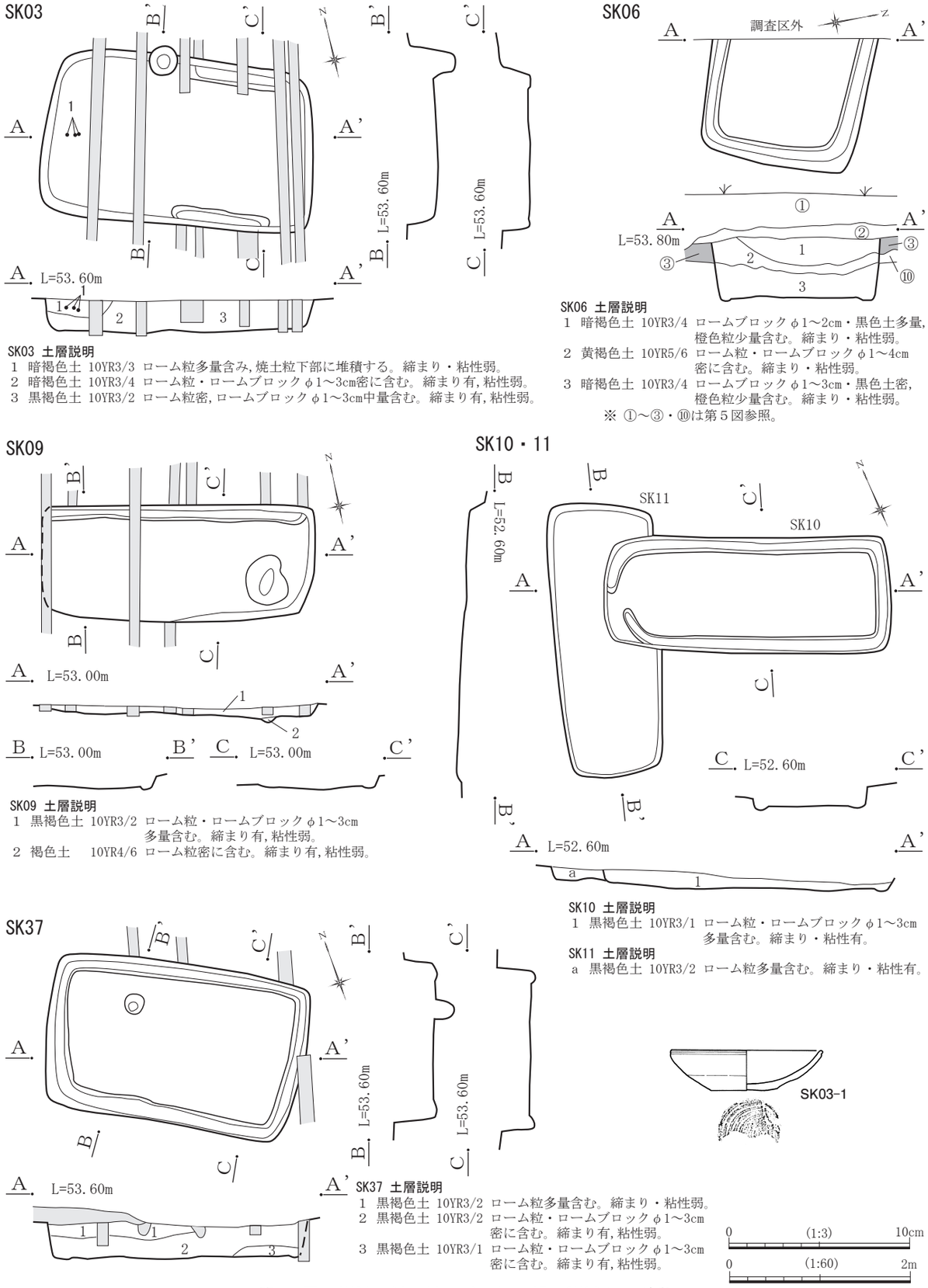
調査区北部，Ｇ－３・４グリッドに位置する。耕作で壊される。SK22・28と重複し，本跡はSK22より古くSK28よりも新しい。平面は隅角に丸味を持った方形。規模は長軸を東西にとり2.85m，短軸2.45m，深さ0.30mを測る。主軸方向はＮ－75°－Ｗを示す。底面は多少の起伏はあるもののほぼ平坦で，壁は垂直に立ち上がる。覆土はローム粒・黒色土ブロック・橙色粒（今市軽石）を含む黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は新旧関係と覆土から中・近世である。

SK03（第11図，第５表，写真図版３・４・10）

調査区北部，Ｈ－３・４グリッドに位置する。耕作で壊される。平面は長方形。規模は長軸を東西にとり3.00m，短軸1.90m，深さ0.35mを測る。主軸方向はＮ－70°－Ｗを示す。底面は多少の起伏はあるもののほぼ平坦で，壁は垂直に立ち上がり，南と北の壁下に壁溝状の僅かな窪みが認められる。また，攪乱のため伴うかは判断できないが，北壁中程の壁際に直径34cm，底面から深さ25cmのピットを検出した。遺構本体の覆土は暗褐色土と黒褐色土が確認され，ローム粒・ロームブロックを顕著に含む人為堆積である。中・近世の遺物は覆土上層より土師質土器皿が出土した。時期は遺物と覆土から17世紀前葉である。



第 10 図　SK01・02，SK01 出土遺物



SK03 土層説明

1 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒多量含み,焼土粒下部に堆積する。締まり・粘性弱。
2 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・ロームブロックφ1～3cm密に含む。締まり有,粘性弱。
3 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒密,ロームブロックφ1～3cm中量含む。締まり有,粘性弱。

SK06 土層説明

1 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロックφ1～2cm・黒色土多量,橙色粒少量含む。締まり・粘性弱。
2 黄褐色土 10YR5/6 ローム粒・ロームブロックφ1～4cm密に含む。締まり・粘性弱。
3 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロックφ1～3cm・黒色土密,橙色粒少量含む。締まり・粘性弱。
※ ①～③・⑩は第５図参照。

SK09 土層説明

1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ロームブロックφ1～3cm多量含む。締まり有,粘性弱。
2 褐色土 10YR4/6 ローム粒密に含む。締まり有,粘性弱。

SK10 土層説明

1 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒・ロームブロックφ1～3cm多量含む。締まり・粘性有。

SK11 土層説明

a 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒多量含む。締まり・粘性有。

SK37 土層説明

1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒多量含む。締まり・粘性弱。
2 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ロームブロックφ1～3cm密に含む。締まり有,粘性弱。
3 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒・ロームブロックφ1～3cm密に含む。締まり有,粘性弱。

第 11 図　SK03・06・09・10・11・37, SK03 出土遺物

SK06（第11図，写真図版４）

調査区北西部，Ｇ－２グリッドに位置する。西部分が調査区外になる。平面は方形基調で，SK37と同形態と判断し，方形竪穴遺構とした。規模は東西1.55ｍ以上，南北1.80ｍ，調査区際の土層観察による深さは0.65ｍを測る。主軸方向は東西に仮定するとＮ－65°－Ｗを示す。底面はほぼ平坦で，壁は垂直に立ち上がり，壁下に幅15㎝，深さ最大６㎝の溝が全周するとみられる。覆土は暗褐色土と黄褐色土が確認され，ロームブロックを顕著に含む暗褐色土を主体にした人為堆積である。中・近世に帰属する遺物は出土していない。時期は旧表土を掘り込む構築層位から中・近世である。

SK09（第11図，写真図版４）

調査区南東部，Ｌ－５・６グリッドに位置する。耕作により壊され遺存状態は悪い。SB02と重複し本跡が新しい。平面は長方形。規模は長軸を東西にとり，西壁が耕作により失われているため推定で3.00ｍ，短軸1.30ｍ，深さは最も遺存のよい北壁を基準にすると0.14ｍを測る。旧表土から掘り込まれているとするならば現状よりも深度はある。主軸方向はＮ－78°－Ｗを示す。底面は多少の起伏はあるもののほぼ平坦である。壁は僅かな残存で，北壁下が壁溝状に僅かに窪んでいる。また，東部分に底面より10㎝深い窪みを検出した。遺構本体の覆土は黒褐色土を主体とし，ローム粒・ロームブロックを顕著に含む人為堆積である。遺物は出土していない。時期は形態から18世紀とみられる。

SK10（第11・12図，第５表，写真図版４・10）

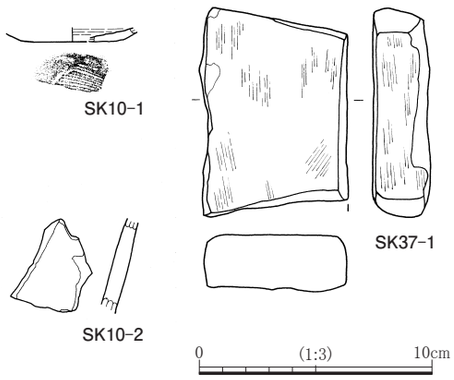
調査区南東部，Ｎ－６グリッドに位置する。SK11と重複し本跡が新しい。平面は長方形。規模は長軸を東西にとり3.16ｍ，短軸1.30ｍ，深さは最も遺存のよい北壁を基準にすると0.19ｍを測る。旧表土から掘り込まれているとするならば現状よりも深度はある。主軸方向はＮ－67°－Ｗを示す。底面は多少の起伏はあるもののほぼ平坦である。壁は僅かな残存で，壁下に幅15㎝，深さ３㎝の溝がほぼ全周しているが，西部分は内側にずれて構築されている。覆土はローム粒・ロームブロックを顕著に含む黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は近世の土師質土器皿と鍋が出土している。時期は遺物から18世紀である。

SK11（第11図，写真図版４）

調査区南東部，Ｍ・Ｎ－６グリッドに位置する。SK10と重複し本跡が古い。平面は長方形。規模は長軸を南北にとり3.05ｍ，短軸1.16ｍ，深さは最も遺存のよい北壁を基準にすると0.18ｍを測る。主軸方向はＮ－20°－Ｅを示す。底面はほぼ平坦なものの南へ向け僅かながら傾斜する。壁は僅かな残存で壁溝状の小溝はない。覆土はローム粒を顕著に含む黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。時期は形態と重複関係から17世紀前葉以降の近世とみられる。

SK37（第11・12図，第５表，写真図版４・10）

調査区北西部，Ｈ－２・３グリッドに位置する。建物基礎下の検出で上部を壊される。平面は長方形。規模は長軸を東西にとり2.90ｍ，短軸1.80ｍ，深さ0.45ｍを測る。主軸方向はＮ－61°－Ｗを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，壁下に幅12～20㎝，深さ最大11㎝の溝が全周する。また，北壁の壁際に直径20㎝，底面より深さ16㎝のピットを検出した。遺構本体の覆土はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土を主体にした人為堆積である。中・近世の遺物は砥石が出土している。時期は中・近世である。



第 12 図　SK10・37 出土遺物

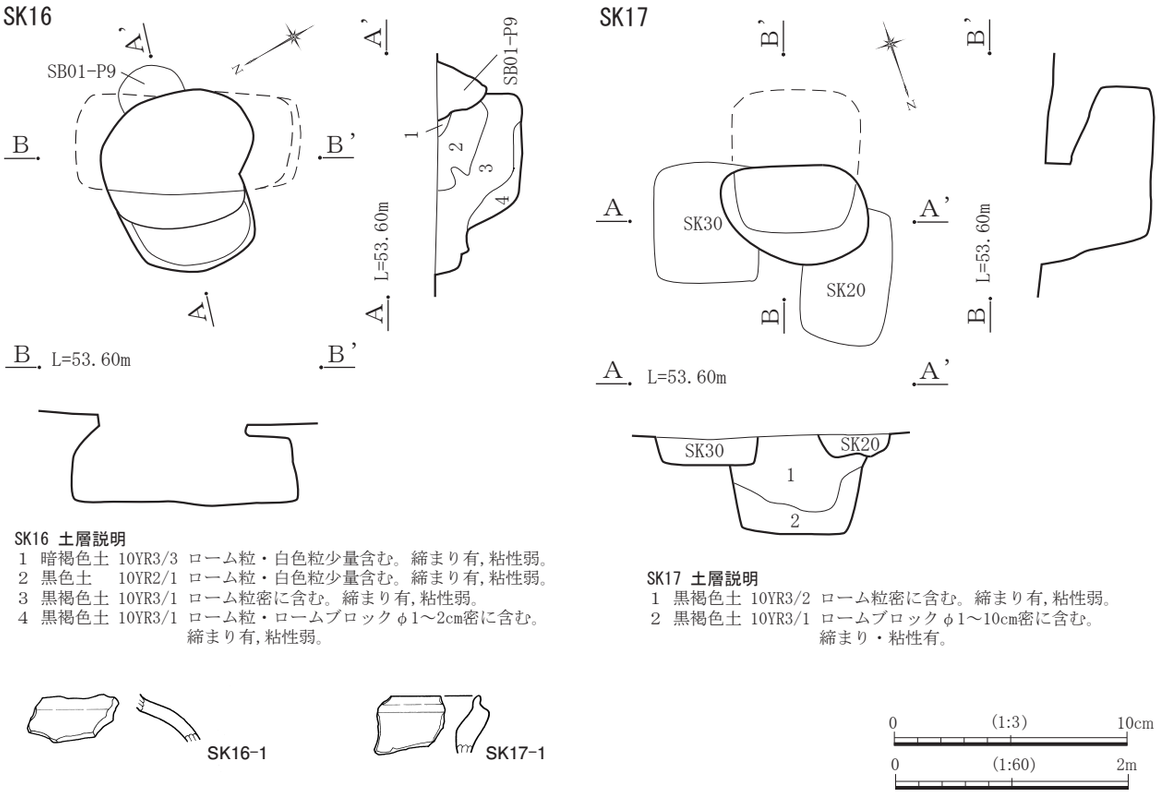
第３項　地下式坑

SK16（第13図，第５表，写真図版４・10）

調査区西部，Ｉ・Ｊ－２グリッドに位置する。SB01と重複し本跡が古い。壁際の天井が残存していたことから地下式坑と判断したものである。形態は横長方形単室の主室に半円形の浅い竪坑を伴うが，小型で天井も低い。竪坑は主室の西側に接し，これを基準とした主軸長は東西1.55m，主室底面の規模は東西0.90m，南北1.95m，天井高は0.55mを測る。方向はＮ－71°－Ｗである。主室の底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がる。深さは0.80mを計測し，竪坑は長軸1.16m，短軸0.66m，深さ0.26mである。覆土は暗褐色土・黒色土・黒褐色土が確認され，ローム粒を顕著に含む黒褐色土を主体にした人為堆積である。天井の崩落土は確認できない。中・近世の遺物は土師質土器の鍋・壺が出土している。時期は遺物と重複関係から15世紀後半以前の中世である。

SK17（第13図，第５表，写真図版４・７・10）

調査区西部，Ｉ・Ｊ－１・２グリッドに位置する。SB01，SK20・30，SP38と重複し本跡が最も古い。壁際の天井が残存していることから地下式坑と判断したものである。形態は方形単室の主室が検出されたが，竪坑は主室に重なっていたのであろうか確認されおらず，小型で天井も低い。主室底面の規模は南北1.23m，東西1.08m，天井高は0.70mを測り，南北に主軸を仮定した場合の方向はＮ－14°－Ｅである。主室の底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がる。深さは1.00mを計測する。覆土はローム粒・ロームブロックを顕著に含む黒褐色土を主体にした人為堆積である。天井の崩落土は確認できない。中・近世の遺物は土師質土器の壺が出土している。時期は遺物と重複関係から15世紀後半以前の中世である。



SK16 土層説明
1 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒・白色粒少量含む。締まり有，粘性弱。
2 黒色土 10YR2/1 ローム粒・白色粒少量含む。締まり有，粘性弱。
3 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒密に含む。締まり有，粘性弱。
4 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒・ロームブロックφ1～2cm密に含む。締まり有，粘性弱。

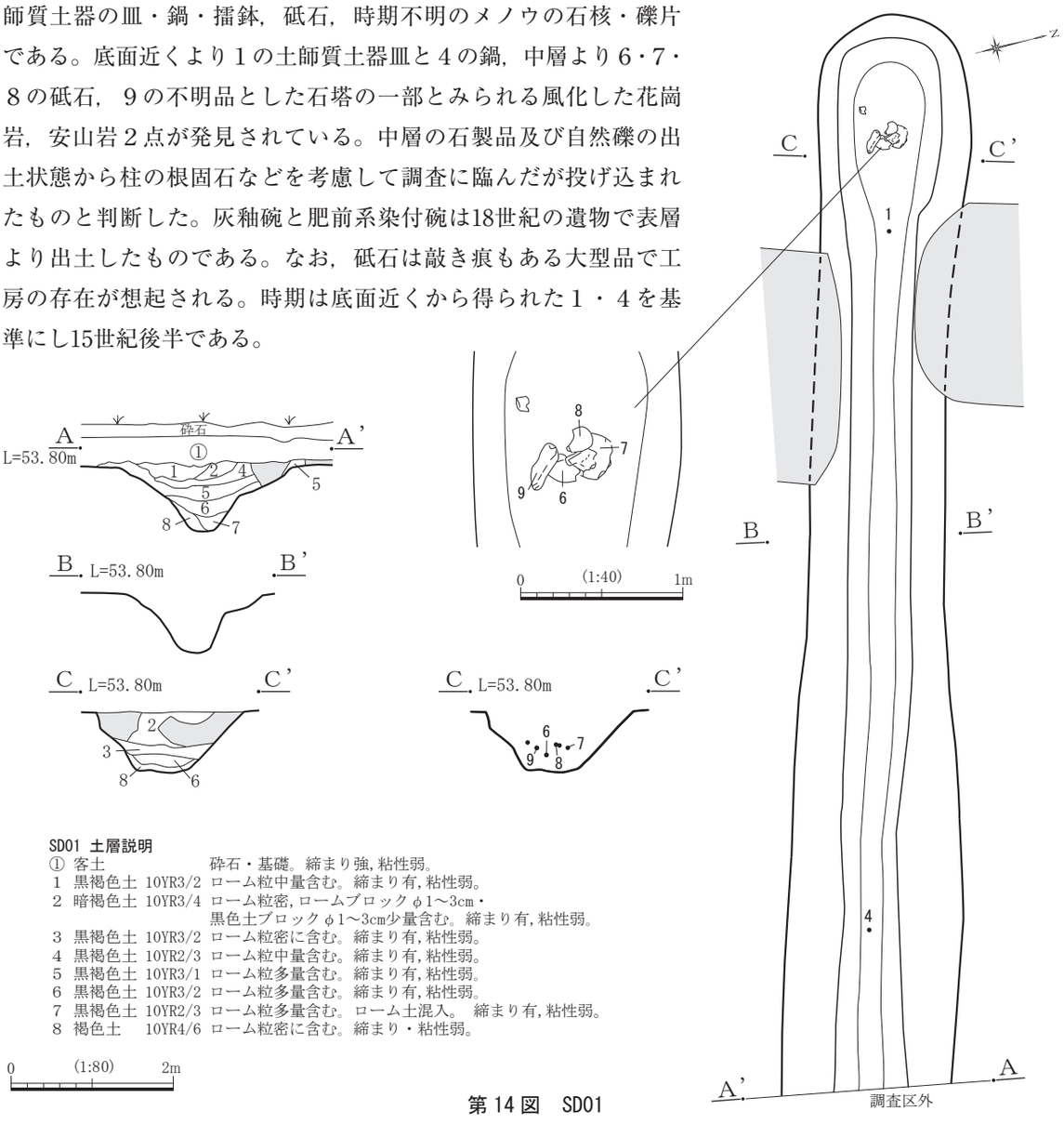
SK17 土層説明
1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒密に含む。締まり有，粘性弱。
2 黒褐色土 10YR3/1 ロームブロックφ1～10cm密に含む。締まり・粘性有。

第 13 図　SK16・17，出土遺物

第４項　溝

SD01（第14・15図，第５表，写真図版５・10）

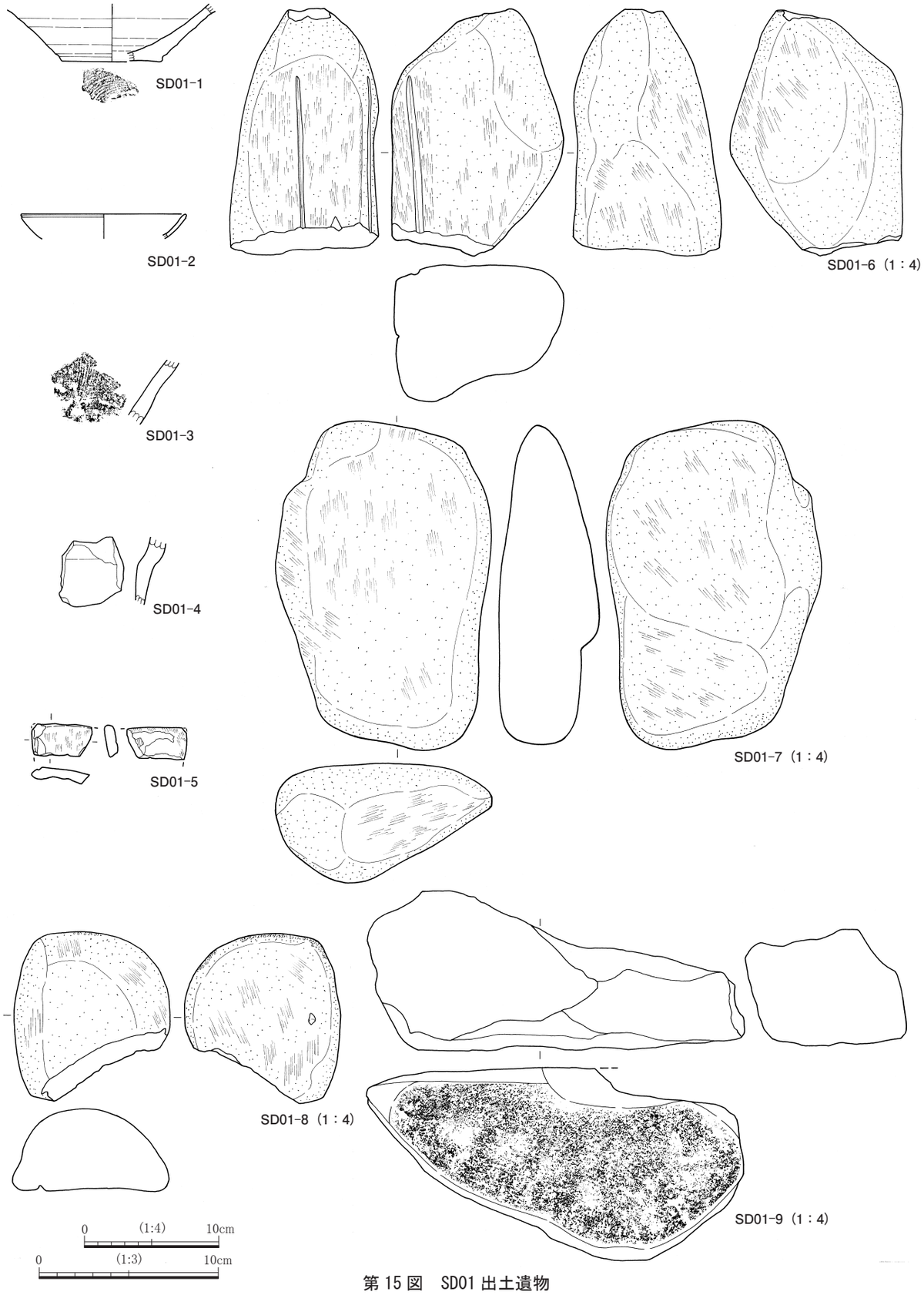
調査区北東部，Ｇ－5，Ｈ－５・６・７グリッドに位置し，上部が建物の基礎により壊されている。検出全長は13.45mで直線状に構築され，西は座標Y＝51945ラインで止まり，東はさらに調査区外へと延びる。西の調査区際にトレンチを掘り下げこれに対応する溝の検出に努めたが，構築されていなかった。走行方向は，Ｎ―75°―Wで，断面は逆台形状である。水平方向を基準とした壁の傾斜角度は両側共に60°前後を測る。上端幅は1.70～2.20m，下端幅は0.25～0.35mであるが，西端部のみ広がり0.85mになる。掘り込み深度は0.80mである。底面は平坦で施設は設けられず，流水及び硬化も認められていない。埋没状況は黒褐色土を主体とし，上層に暗褐色土，底面に壁の崩落と想定される褐色土が堆積する。いずれもローム粒を含有するものの土塁など構築物の存在は示していない。出土遺物は弥生，奈良・平安時代の土器，中・近世に帰属する瀬戸・美濃製品の灰釉碗，肥前系染付碗，土師質土器の皿・鍋・擂鉢，砥石，時期不明のメノウの石核・礫片である。底面近くより１の土師質土器皿と４の鍋，中層より６・７・８の砥石，９の不明品とした石塔の一部とみられる風化した花崗岩，安山岩２点が発見されている。中層の石製品及び自然礫の出土状態から柱の根固石などを考慮して調査に臨んだが投げ込まれたものと判断した。灰釉碗と肥前系染付碗は18世紀の遺物で表層より出土したものである。なお，砥石は敲き痕もある大型品で工房の存在が想起される。時期は底面近くから得られた１・４を基準にし15世紀後半である。



SD01 土層説明

①	客土	砕石・基礎。締まり強，粘性弱。
1	黒褐色土 10YR3/2	ローム粒中量含む。締まり有，粘性弱。
2	暗褐色土 10YR3/4	ローム粒密，ロームブロックφ1～3cm・黒色土ブロックφ1～3cm少量含む。締まり有，粘性弱。
3	黒褐色土 10YR3/2	ローム粒密に含む。締まり有，粘性弱。
4	黒褐色土 10YR2/3	ローム粒中量含む。締まり有，粘性弱。
5	黒褐色土 10YR3/1	ローム粒多量含む。締まり有，粘性弱。
6	黒褐色土 10YR3/2	ローム粒多量含む。締まり有，粘性弱。
7	黒褐色土 10YR2/3	ローム粒多量含む。ローム土混入。 締まり有，粘性弱。
8	褐色土 10YR4/6	ローム粒密に含む。締まり・粘性弱。

第 14 図　SD01



第 15 図　SD01 出土遺物

第５項　土坑

SK04（第16図，第５表，写真図版５・10）

調査区北西部，Ｇ－２・３グリッドに位置する。耕作で壊される。SK05と重複し本跡が新しい。平面は隅角に丸味を持つ長方形。規模は長軸を東西にとり2.13m，短軸1.35m，深さ0.30mを測る。主軸方向はＮ－73°－Ｗを示す。底面はほぼ平坦で，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は鉄製品の釘が出土している。時期は中・近世である。

SK05（第16図，写真図版５）

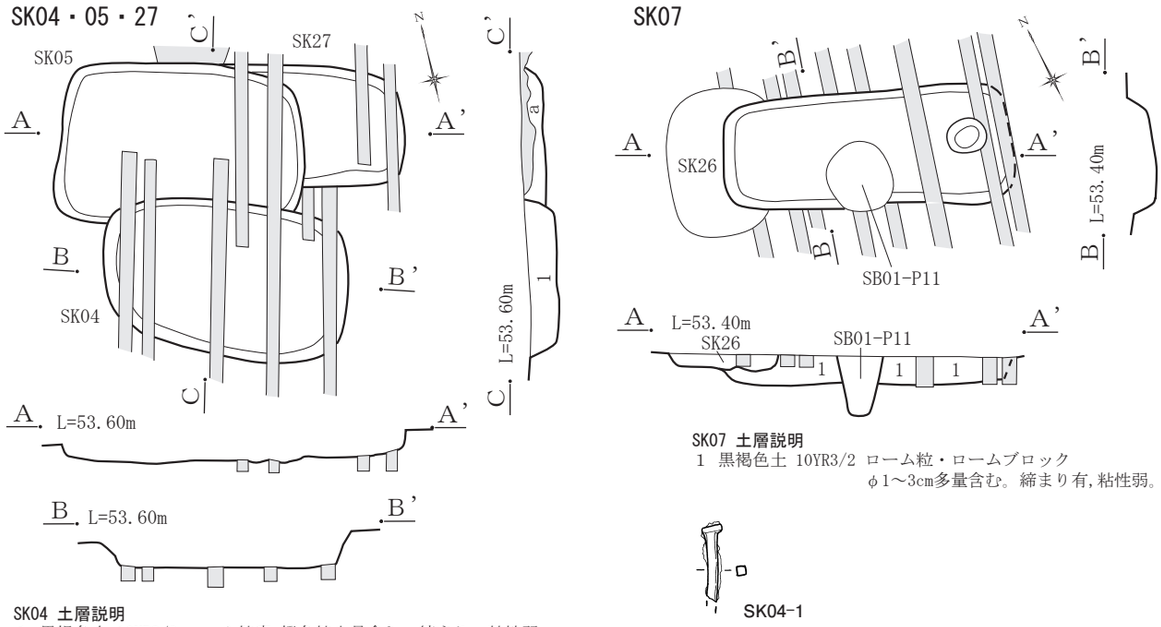
調査区北西部，Ｇ－２・３グリッドに位置する。耕作で壊される。SK04・27と重複し，本跡はSK04より古くSK27よりも新しい。平面は長方形。規模は長軸を東西にとり2.10m，短軸1.38m，深さ0.25mを測る。主軸方向はＮ－73°－Ｗを示す。底面は多少の起伏を持ち，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK07（第16図，写真図版５）

調査区中央部，Ｊ－３グリッドに位置する。耕作で壊される。SB01，SK26と重複し本跡が最も古い。平面は長方形。規模は長軸を東西にとり2.42m，短軸0.97m，深さ0.30mを測る。主軸方向はＮ－69°－Ｗを示す。底面は平坦で，壁は緩やかに立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物はチャートの裂片が出土し，遺構外出土遺物として掲載した。時期は重複関係から15世紀後半以前の中世である。

SK27（第16図，写真図版５）

調査区北西部，Ｇ－３グリッドに位置する。耕作で壊される。SK05と重複し本跡が古い。平面は方形基調とみられ，規模は長軸を東西に仮定すると1.50m以上，短軸1.03m，深さ0.22mを測る。主軸方向はＮ－73°－Ｗを示す。底面は起伏があり壁際が高く，壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。時期は中・近世である。



第 16 図　SK04・05・07・27，SK04 出土遺物

SK08（第17図，写真図版５）

調査区中央部，Ｋ－５グリッドに位置する。耕作で壊される。平面は長方形。規模は長軸を南北にとり2.45m，短軸1.26m，深さ0.30mを測る。主軸方向はＮ－14°－Ｅを示す。底面は平坦で中央が床面より14㎝掘り窪められ，黒褐色土が貼られていた。壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK12（第17図，写真図版６）

調査区中央部，Ｉ－４グリッドに位置する。耕作で壊される。SK25と重複し本跡が古い。平面は長方形。規模は長軸を南北にとり1.69m，短軸1.16m，深さ0.30mを測る。主軸方向はＮ－33°－Ｅを示す。底面はやや起伏を持ち，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK13（第17図，写真図版６）

調査区中央部，Ｉ－３・４グリッドに位置する。SB01，SK25と重複し，本跡はSK25より新しいがSB01との新旧関係は不明である。平面は方形。規模は長軸を南北にとり1.76m，短軸1.42m，深さ0.45mを測る。主軸方向はＮ－24°－Ｅを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，壁下が壁溝状に僅かに窪む。覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK14（第17図，写真図版６）

調査区西部，H・Ｉ－２グリッドに位置する。大半が調査区外になる。平面は方形基調で，規模は東西0.53m以上，南北1.94m，調査区際の土層観察による深さは0.78mを測る。主軸方向は南北に仮定するとＮ－22°－Ｅを示す。底面はほぼ平坦で，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土主体の人為堆積である。遺物は出土していない。時期は旧表土を掘り込む構築層位から中・近世とした。

SK15（第17図，写真図版６）

調査区中央部，Ｊ－３グリッドに位置する。上部を耕作で壊される。平面は方形。規模は長軸を東西にとり1.55m，短軸1.54m，深さ0.25mを測る。主軸方向はＮ－63°－Ｗを示す。底面はほぼ平坦で中央が床面より20㎝掘り窪められ，黒褐色土が貼られていた。壁は垂直に立ち上がり，壁下が壁溝状に僅かに窪む。覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK18（第17図，写真図版６）

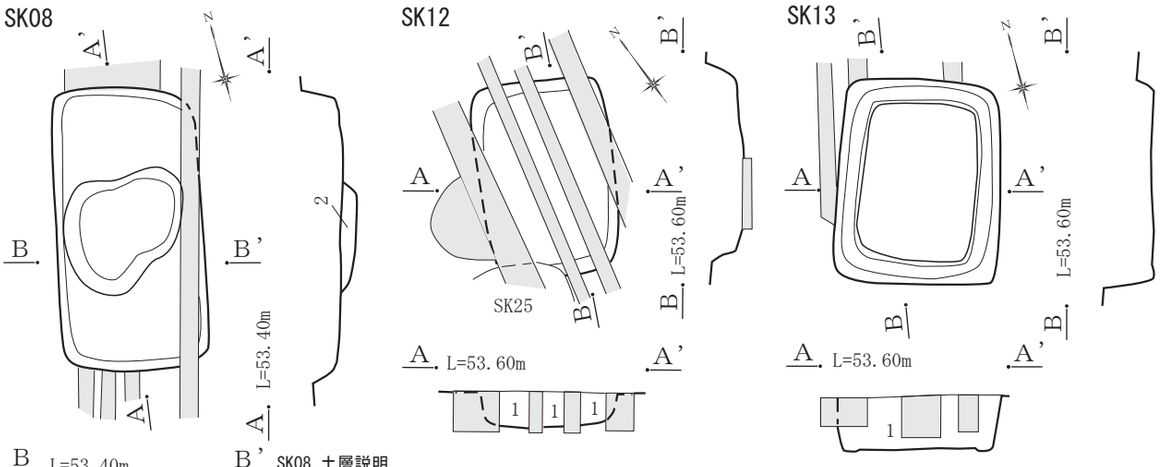
調査区中央部，Ｋ－３・４グリッドに位置する。耕作で壊される。平面は方形。規模は長軸を東西にとり1.20m，短軸1.03m，深さ0.22mを測る。主軸方向はＮ－63°－Ｗを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK19（第17図，写真図版６）

調査区西部，Ｉ－２グリッドに位置する。SB01，SK29と重複し，本跡はSK29より新しいがSB01との新旧関係は不明である。平面は長方形。規模は長軸を東西にとり1.62m，短軸1.18m，深さ0.50mを測る。主軸方向はＮ－85°－Ｗを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK29（第17図，写真図版６）

調査区西部，Ｉ－２グリッドに位置する。SB01，SK19と重複し，本跡はSK19より古いがSB01との新旧関係は不明である。平面は方形基調とみられるもSK19に大部分を壊される。規模は東西0.95m，南北0.60m以上，深さ0.48m，主軸方向は不明である。残存した底面は多少の起伏があり，壁は垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は中・近世である。



SK08 土層説明

1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ロームブロック φ1～3cm多量含む。締まり有,粘性弱。

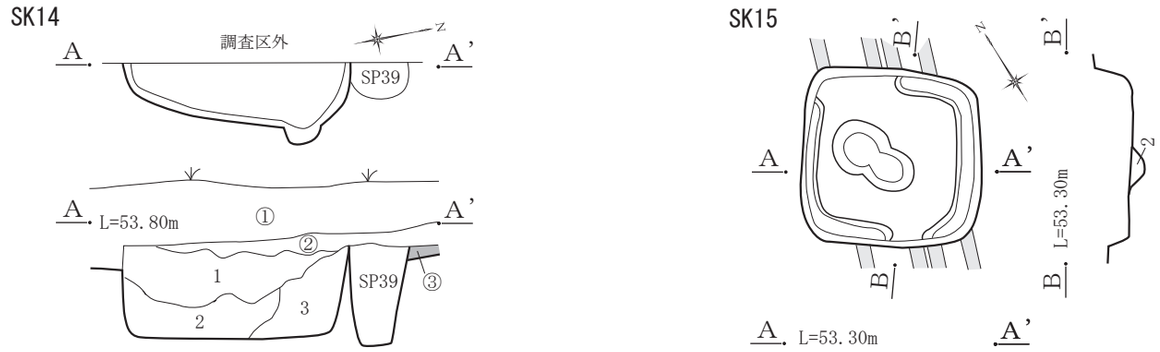
2 黒褐色土 10YR3/1 ロームブロック φ1～3cm密に含む。締まり有,粘性弱。

SK12 土層説明

1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ロームブロック φ1～3cm密に含む。締まり有,粘性弱。

SK13 土層説明

1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒密,ロームブロック φ1～3cm・黒色土ブロック φ1～3cm多量含む。締まり有,粘性弱。



SK14 土層説明

1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒多量,ロームブロック φ1～2cm少量含む。
締まり有,粘性弱。

2 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒密,ロームブロック φ1～3cm中量,
橙色粒少量含む。締まり有,粘性弱。

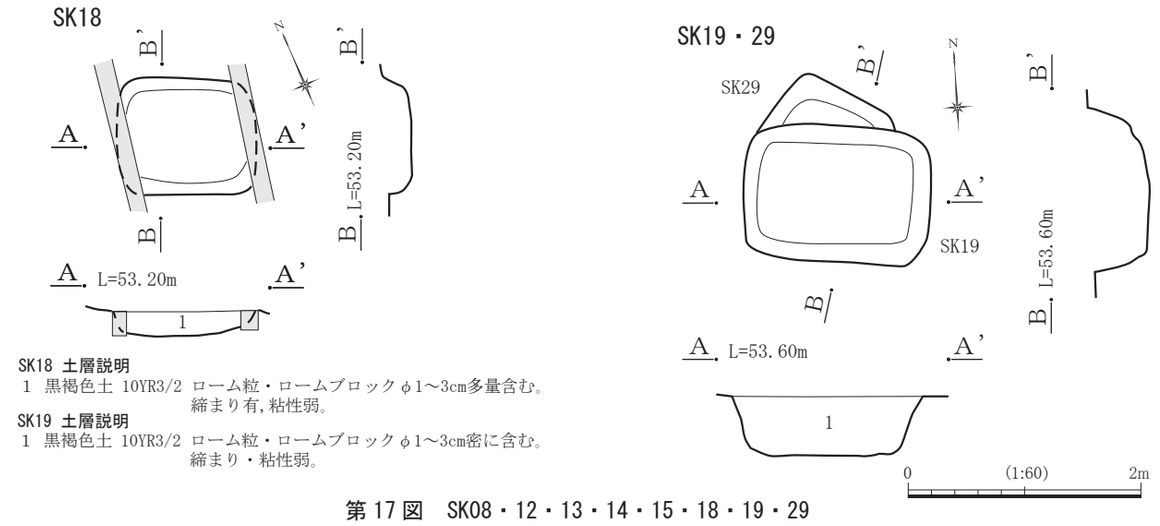
3 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒密,ロームブロック φ1～3cm・
黒色土ブロック φ1～10cm多量含む。締まり・粘性有。

※ ①～③ は第５図参照。

SK15 土層説明

1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・橙色粒多量,黒色土ブロック
φ1～3cm中量含む。締まり有,粘性弱。

2 黒褐色土 10YR3/1 ロームブロック φ1～3cm密に含む。
締まり有,粘性弱。



SK18 土層説明

1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ロームブロック φ1～3cm多量含む。
締まり有,粘性弱。

SK19 土層説明

1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ロームブロック φ1～3cm密に含む。
締まり・粘性弱。

第 17 図　SK08・12・13・14・15・18・19・29

SK20（第18図，写真図版７）

調査区西部，Ｉ－１･２グリッドに位置する。SK17と重複し本跡が新しい。平面は長方形。規模は長軸を南北にとり1.18m，短軸0.75m，深さ0.21mを測る。主軸方向はＮ－25°－Ｅを示す。底面は起伏を持ち，壁は緩やかに立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。時期は中･近世である。

SK21（第18図，写真図版７）

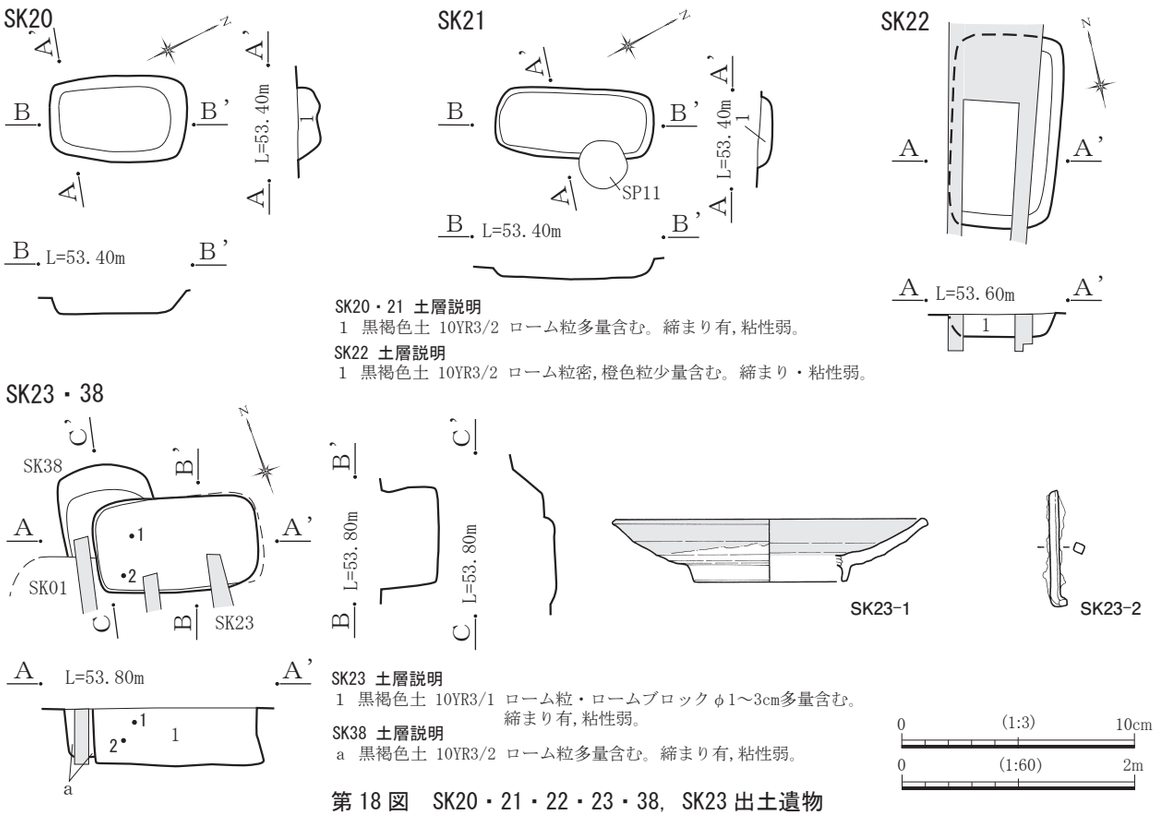
調査区西部，Ｉ・Ｊ－２・３グリッドに位置する。SB01，SP11と重複し，本跡はSP11より古いがSB01との新旧関係は不明である。平面は長方形。規模は長軸を南北にとり1.36m，短軸0.58m，深さ0.12mを測る。主軸方向はＮ－28°－Ｅを示す。底面は平坦となり，壁は僅かな残存である。覆土は黒褐色土の単層で，遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK22（第18図，写真図版７）

調査区北部，Ｇ・Ｈ－３・４グリッドに位置する。耕作で壊される。SK02と重複し本跡が新しい。平面は長方形。規模は長軸を南北にとり1.64m，短軸0.90m，深さ0.21mを測る。主軸方向はＮ－16°－Ｅを示す。底面は平坦で，壁は緩やかに立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。中・近世の遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK23（第18図，第５表，写真図版７・10）

調査区北部，Ｇ－４グリッドに位置する。耕作で壊される。SK01･38と重複し本跡が最も新しい。平面は長方形。規模は長軸を東西にとり1.40m，短軸0.78m，深さ0.50mを測る。主軸方向はＮ－73°－Ｗを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は瀬戸・美濃製品の輪禿皿と鉄製品の釘が覆土中層より出土している。時期は遺物から17世紀前葉である。



第 18 図　SK20・21・22・23・38，SK23 出土遺物

SK38（第18図，写真図版７）

調査区北部，Ｇ－４グリッドに位置する。耕作で壊される。SK01・23と重複し本跡が最も古い。平面は方形基調とみられるもSK01・23に大きく壊されている。規模は南北0.80ｍ以上，短軸0.82ｍ，深さ0.40ｍを測る。南北の軸方向はＮ－10°－Ｅを示す。底面は平坦で，壁は西壁が垂直，北壁が緩やかに立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。時期は15世紀後半以前の中世である。

SK24（第19図，写真図版７）

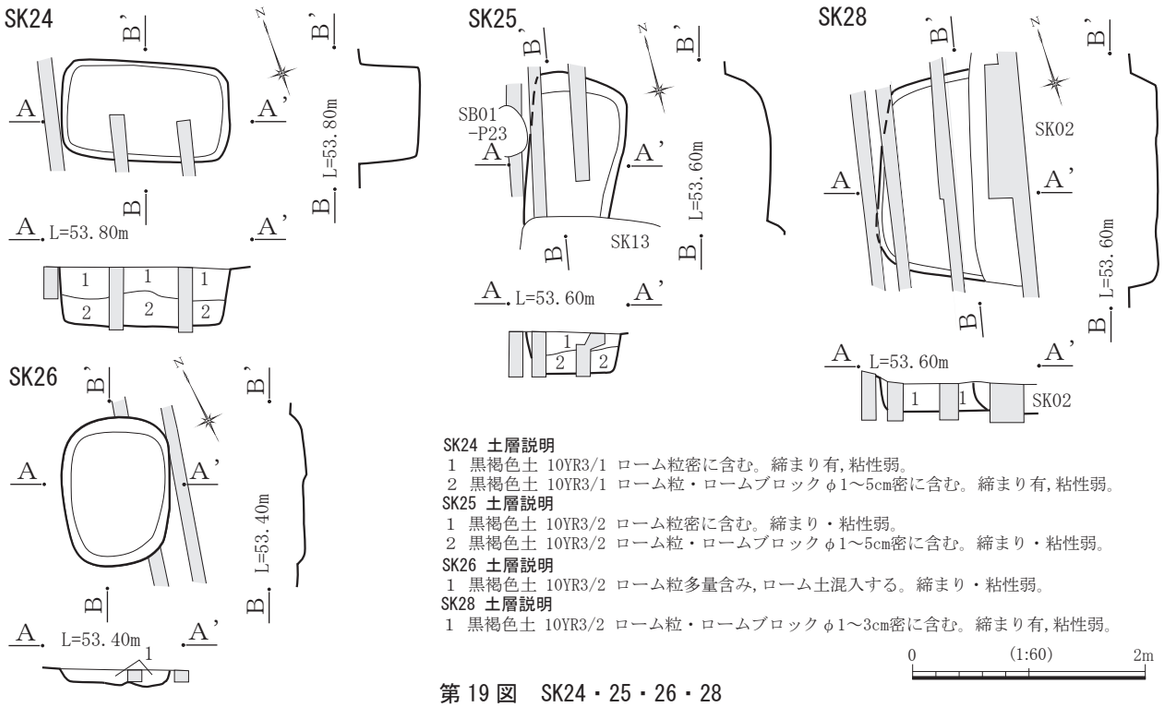
調査区北部，Ｇ－５グリッドに位置する。耕作で壊される。平面は長方形。規模は長軸を東西にとり1.45ｍ，短軸0.87ｍ，深さ0.54ｍを測る。主軸方向はＮ－68°－Ｗを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土主体の人為堆積である。中・近世の遺物では土師質土器の鍋が出土している。時期は遺物と覆土から17世紀前葉である。

SK25（第19図，写真図版７）

調査区中央部，Ｉ－４グリッドに位置する。耕作で壊される。SB01，SK12・13と重複し，本跡はSK13より古くSK12よりも新しいがSB01との新旧関係は不明である。平面は長方形。規模は長軸を南北にとり1.20ｍ以上，短軸は0.85ｍ，深さ0.38ｍを測る。主軸方向はＮ－24°－Ｅを示す。底面は平坦で，壁は東壁が垂直，北壁が緩やかに立ち上がり，覆土は黒褐色土で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK26（第19図，写真図版７）

調査区中央部，Ｊ－３グリッドに位置する。耕作で壊される。SB01，SK07と重複し，本跡はSB01より古くSK07よりも新しい。平面は隅角に丸味を持った長方形。規模は長軸を南北にとり1.30ｍ，短軸0.94ｍ，深さ0.12ｍを測る。主軸方向はＮ－28°－Ｅを示す。底面は起伏を持ち，壁は僅かな残存である。覆土は黒褐色土の単層で，遺物は出土していない。時期は重複関係から15世紀後半以前の中世である。



第19図　SK24・25・26・28

SK28（第19図，写真図版３）

調査区北西部，Ｇ－３グリッドに位置する。耕作で壊される。SK02と重複し本跡が古い。平面は方形基調とみられるもSK02に大きく壊されている。規模は東西0.80m以上，南北1.80m，深さ0.24mを測る。主軸方向は東西に仮定するとＮ－75°－Ｗを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK30（第20図，写真図版４）

調査区西部，Ｉ・Ｊ－２グリッドに位置する。SB01，SK17と重複し本跡が最も新しい。平面は方形。規模は長軸を南北にとり1.04m，短軸0.90m，深さ0.25mを測る。主軸方向はＮ－16°－Ｅを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は重複関係から15世紀後半以降の中・近世である。

SK31（第20図，写真図版８）

調査区西部，Ｊ－１グリッドに位置する。大半が調査区外になる。平面は方形基調とみられ，規模は東西0.43m以上，南北0.95m，調査区際の土層観察による深さは0.43mを測る。主軸方向は南北に仮定するとＮ－13°－Ｅを示す。底面はほぼ平坦で，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は旧表土を掘り込む構築層位から中・近世と判断した。

SK32（第20図，写真図版８）

調査区東部，Ｋ－５・６グリッドに位置する。耕作で壊される。平面は長方形。規模は長軸を南北にとり1.26m，短軸0.62m，深さ0.45mを測る。主軸方向はＮ－25°－Ｅを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒色土の単層で人為堆積である。遺物は出土していない。時期は近世である。

SK33（第20図，写真図版８）

調査区南部，Ｍ－５グリッドに位置する。平面は長方形。規模は長軸を南北にとり1.46m，短軸1.00m，深さ0.21mを測る。主軸方向はＮ－25°－Ｅを示す。底面は平坦で，壁は緩やかに立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層である。中・近世の遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK34（第20図，写真図版８）

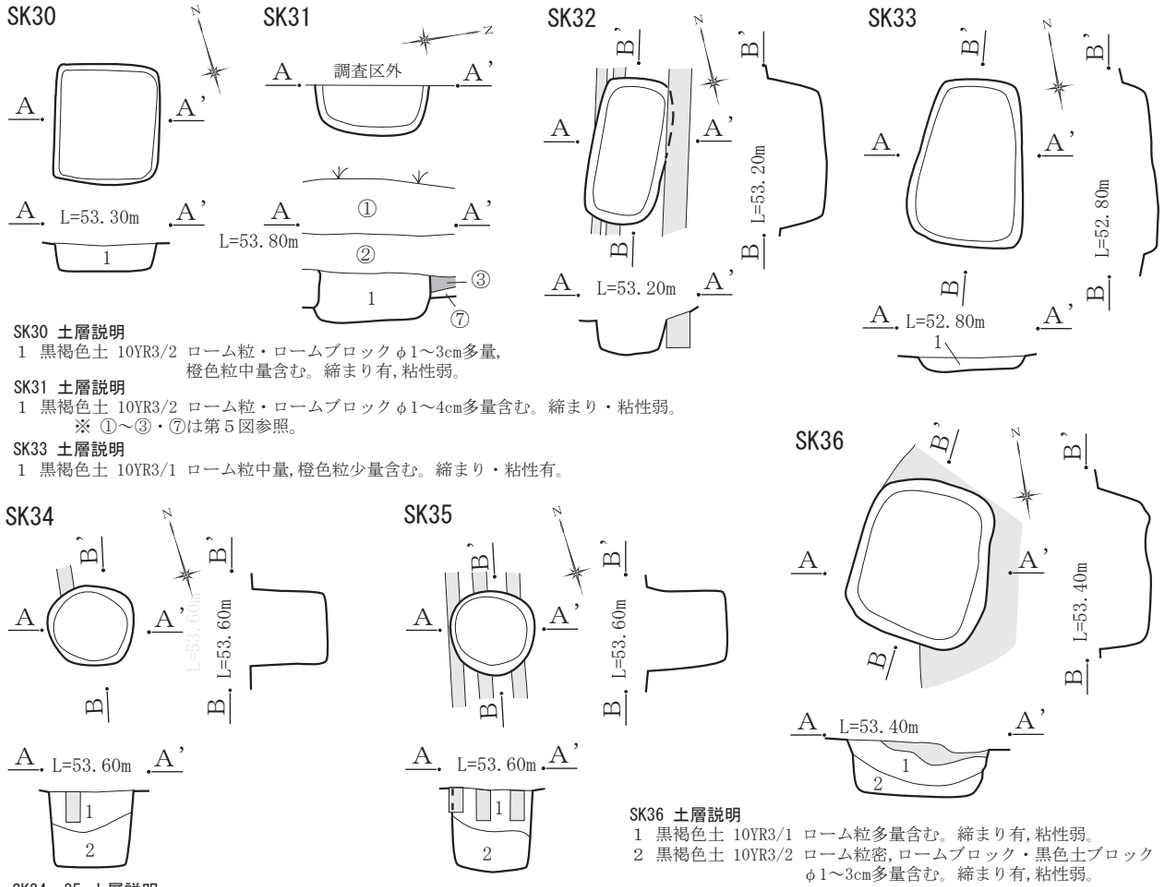
調査区北西部，Ｇ－２グリッドに位置する。耕作で上部を壊される。平面は円形。規模は長軸を東西にとり0.75m，短軸0.68m，深さ0.65mを測る。主軸方向はＮ－66°－Ｗを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，円筒形となる。覆土は黒色土を主体とする。中・近世の遺物は出土していない。時期は形態と覆土から近世と判断した。

SK35（第20図，写真図版８）

調査区北西部，Ｇ－２グリッドに位置する。耕作で上部を壊される。平面は円形。規模は長軸を東西にとり0.73m，短軸0.71m，深さ0.72mを測る。主軸方向はＮ－66°－Ｗを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，円筒形となる。覆土は黒色土を主体とする。遺物は土師質土器鍋の細片が出土している。時期は形態と覆土から近世と判断した。

SK36（第20図，写真図版８）

調査区西部，Ｈ・Ｉ－２・３グリッドに位置する。上部を建物の基礎によって大きく壊される。SB01と重複し本跡が新しい。平面は隅角に丸味を持つ方形。規模は長軸を南北にとり1.39m，短軸1.17m，深さ0.45mを測る。主軸方向はＮ－25°－Ｅを示す。底面は起伏を持ち，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒褐色土を主体にした人為堆積である。遺物は出土していない。時期は重複関係から15世紀後半以降の中・近世である。



SK30 土層説明
1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ロームブロック φ1～3cm多量,
橙色粒中量含む。締まり有,粘性弱。

SK31 土層説明
1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ロームブロック φ1～4cm多量含む。締まり・粘性弱。
※ ①～③・⑦は第５図参照。

SK33 土層説明
1 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒中量,橙色粒少量含む。締まり・粘性有。

SK34・35 土層説明
1 黒色土 10YR2/1 ローム粒中量,橙色粒少量含む。締まり・粘性弱。
2 黒色土 10YR2/1 ローム粒少量含む。締まり・粘性弱。

SK36 土層説明
1 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒多量含む。締まり有,粘性弱。
2 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒密,ロームブロック・黒色土ブロック
φ1～3cm多量含む。締まり有,粘性弱。

SK39 土層説明
1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ロームブロック・φ1～2cm密に含む。
締まり有,粘性弱。

SK40 土層説明
1 黒色土 10YR2/1 ローム粒・ロームブロックφ1～3cm密に含む。締まり・粘性弱。

SK42 土層説明
1 黒色土 10YR2/1 ローム粒・ロームブロックφ1～3cm多量含む。締まり・粘性弱。

SK43 土層説明
1 黒色土 10YR2/1 ローム粒・橙色ブロック多量含む。締まり有,粘性弱。

0 (1:60) 2m

第 20 図　SK30・31・32・33・34・35・36・39・40・41・42・43

SK39（第20図，写真図版８）

調査区北部，Ｈ－４グリッドに位置する。耕作で壊され，東壁は検出できなかった。SK41と重複し本跡が古い。平面は長方形。規模は長軸を南北にとり1.50m，短軸は推定0.80m，深さ0.28mを測る。主軸方向はＮ－15°－Ｅを示す。底面は平坦で，遺存状態のよい南壁は緩やかに立ち上がり，覆土は黒褐色土の単層で人為堆積である。中・近世の遺物は出土していない。時期は中・近世である。

SK40（第20図，写真図版９）

調査区北部，Ｆ－４・５グリッドに位置する。南部分を建物の基礎により壊されている。平面は長方形。規模は長軸を南北にとり2.07m以上，短軸0.83m，深さ0.22mを測る。主軸方向はＮ－23°－Ｅを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒色土の単層である。中・近世の遺物は出土していない。時期は形態と覆土の状態から近世と判断した。

SK41（第20図，写真図版８）

調査区北部，Ｈ－４グリッドに位置する。上部を耕作で壊される。SK39と重複し本跡が新しい。平面は円形。規模は長軸を東西にとり0.80m，短軸0.70m，深さ0.58mを測る。主軸方向はＮ－75°－Ｗを示す。底面は平坦で，壁は垂直に立ち上がり，円筒形となる。覆土は黒色土の単層である。遺物は出土していない。時期は形態と覆土から近世と判断した。

SK42（第20図，写真図版９）

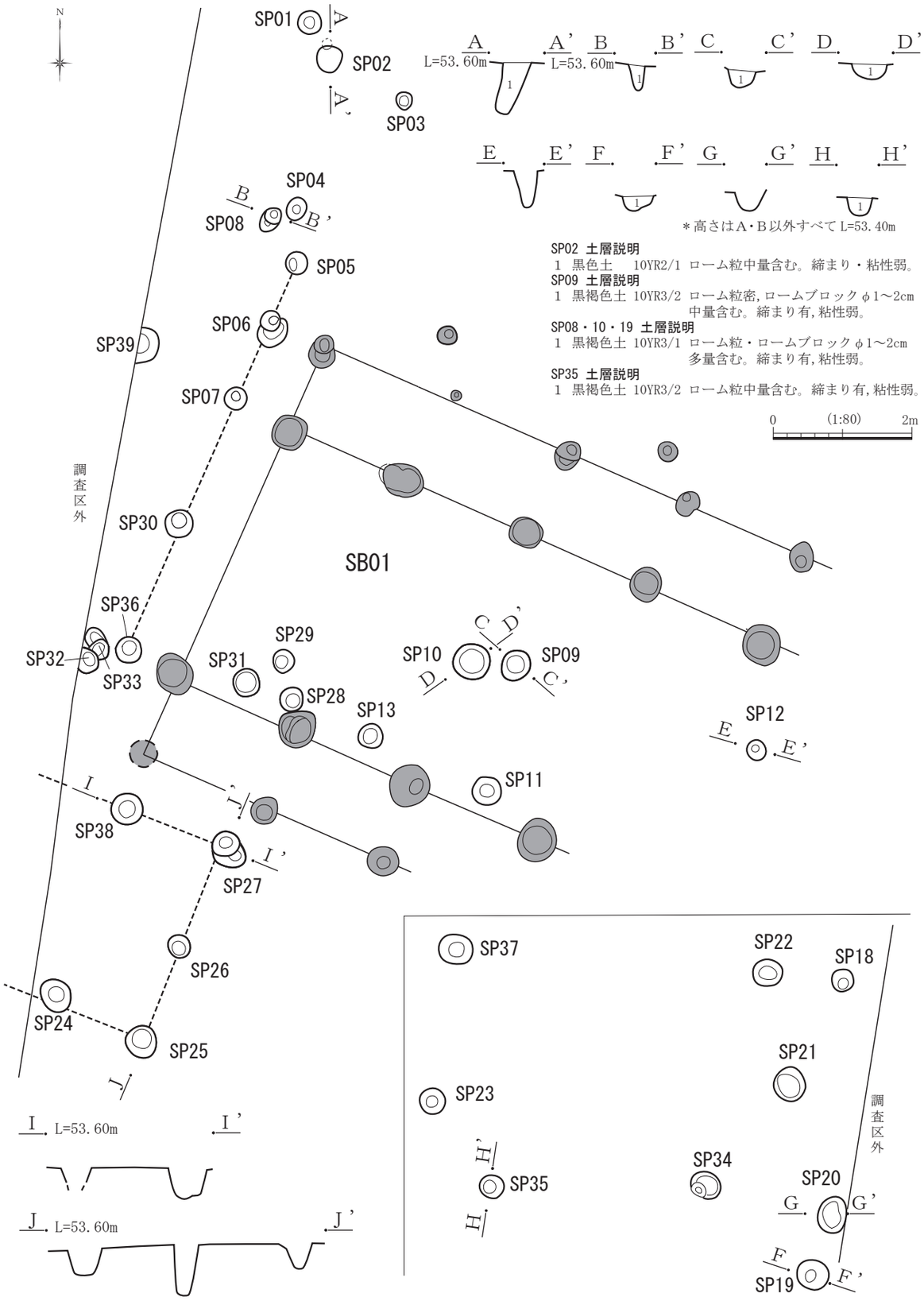
調査区北部，Ｆ－５・６グリッドに位置する。東部分を建物の基礎により大きく壊されている。平面は長方形。規模は長軸を東西にとり1.60m以上，短軸0.84m，深さ0.28mを測る。主軸方向はＮ－75°－Ｗを示す。底面は起伏が激しく，壁は緩やかに立ち上がり，覆土は黒色土の単層である。遺物は出土していない。時期は覆土から近世と判断した。

SK43（第20図，写真図版９）

調査区南東部，Ｍ－５グリッドに位置する。SK34・35・41と同形態であり，構築時には旧表土を掘り込んでいたと考えられ，しっかりとした構築とみられる。平面は円形。規模は長軸を南北にとり0.70m，短軸0.65m，深さ0.28mを測る。主軸方向はＮ－30°－Ｗを示す。底面はほぼ平坦で，壁は垂直に立ち上がり，覆土は黒色土の単層である。遺物は出土していない。時期は形態と覆土から近世である。

第６項　ピット（第21図，第４表，写真図版９）

調査では，遺構に伴わないと判断した単独のピットが39基検出され，調査区西部のＩ・Ｊ－２・３と東部のＫ・Ｌ－５・６グリッドに集中していた。規模・形態は第４表に記載したが，平面は円形基調で，断面は円筒形と杭状，皿状に分類され，数量は杭状が最も多い。規模は長軸25～55㎝，短軸23～52㎝，深さ20～79㎝に収まり，長軸32～40㎝と47～52㎝，深さ34～40㎝にまとまる。覆土は黒褐色土が主体で，ローム粒を含有する。調査区西部ではSB01に関係するピットが含まれている可能性があり，特にSP09・10は建物跡の中央に位置し，地鎮などの祭儀行為に伴う遺構で，遺物は出土しておらず有機物を埋納した痕跡かもしれない。また，SP06・07・30・36は柱筋が通るなど，SB01の西側梁行を構成するとの見方もできる。ただし，ピットの規模や柱間寸法は明らかにSB01とは異なっていた。あるいはSP05を加えて柵列の存在を考慮したが，形態・柱間寸法はまちまちである。さらに，SP24・25・26・27・38の配置は側柱建物を連想させるも調査範囲は僅かで，形態・深度・覆土は規格性を欠く。これらのことから建物などの構築物を積極的に復元することはできず単独遺構として報告する。ここでは可能性を指摘するにとどめておきたい。時期については，遺物は出土していないものの覆土の状況と重複関係から中・近世とした。



第21図 SP01～13・18～39

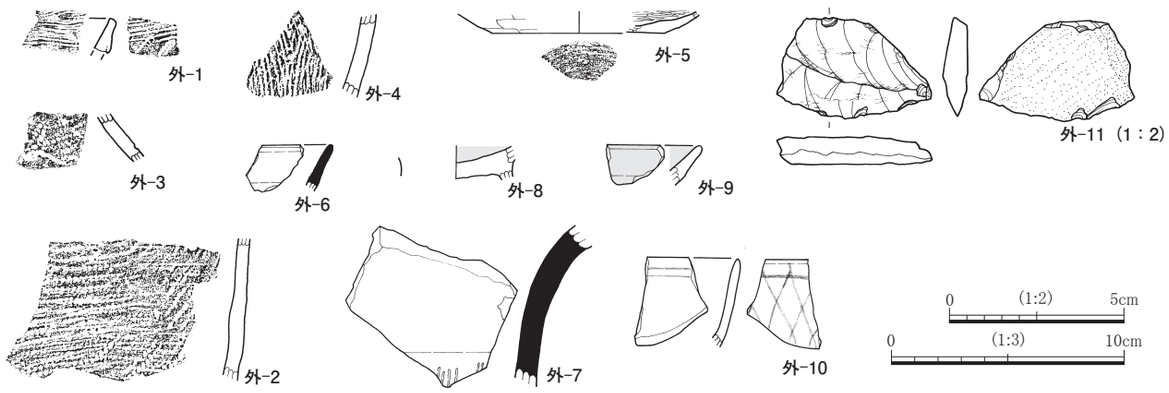
第４表　ピット一覧表

遺構	位置	平面形	断面形	長軸×短軸×深さ	主な覆土	遺構	位置	平面形	断面形	長軸×短軸×深さ	主な覆土
SP01	G－2	円形	円筒形	36 × 33 × 37	黒色土	SP21	K－6	円形	円筒形	47 × 44 × 40	黒褐色土
SP02	G－2	楕円形	杭状	48 × 35 × 73	黒色土	SP22	K－6	円形	杭状	44 × 40 × 49	黒褐色土
SP03	H－2	円形	円筒形	25 × 23 × 20	黒色土	SP23	K－5	円形	杭状	38 × 38 × 34	黒褐色土
SP04	H－2	円形	杭状	33 × 28 × 22	黒褐色土	SP24	J－1	円形	杭状	50 × 42 × 47	黒褐色土
SP05	H－2	円形	杭状	34 × 33 × 71	黒褐色土	SP25	J－2	円形	杭状	48 × 43 × 38	黒色土
SP06	H－2	楕円形	杭状	55 × 43 × 35	黒褐色土	SP26	J－2	円形	杭状	35 × 33 × 75	黒褐色土
SP07	H－2	円形	皿状	32 × 32 × 37	黒褐色土	SP27	J－2	円形	円筒形	40 × 36 × 45	黒褐色土
SP08	H－2	楕円形	杭状	40 × 24 × 37	黒褐色土	SP28	I－2	円形	杭状	33 × 32 × 48	黒褐色土
SP09	I－3	円形	円筒形	47 × 40 × 39	黒褐色土	SP29	I－2	円形	杭状	33 × 32 × 33	黒褐色土
SP10	I－3	円形	皿状	52 × 52 × 22	黒褐色土	SP30	I－2	円形	円筒形	40 × 39 × 59	黒褐色土
SP11	I･J－3	円形	円筒形	40 × 40 × 27	黒褐色土	SP31	I－2	円形	皿状	40 × 38 × 25	黒褐色土
SP12	I－3	円形	杭状	30 × 29 × 54	黒褐色土	SP32	I－1	円形か	杭状	32 × 〈27〉 × 50	黒褐色土
SP13	I－2	円形	円筒形	36 × 35 × 21	黒褐色土	SP33	I－1･2	楕円形か	杭状	43 × 〈28〉 × 36	黒褐色土
SP14	K･L－2	円形	杭状	36 × 32 × 41	黒褐色土	SP34	L－6	円形	皿状	46 × 38 × 30	黒褐色土
SP15	L－2	楕円形	杭状	〈45〉 × 35 × 40	黒褐色土	SP35	L－5	円形	円筒形	36 × 35 × 28	黒褐色土
SP16	L－2	円形	杭状	33 × 32 × 49	黒褐色土	SP36	I－2	円形	円筒形	35 × 30 × 34	黒褐色土
SP17	L－3	円形	杭状	52 × 45 × 56	黒褐色土	SP37	K－5	円形	円筒形	50 × 44 × 34	黒褐色土
SP18	K－6	円形	杭状	33 × 30 × 38	黒褐色土	SP38	J－2	円形	円筒形	48 × 45 × 〈25〉	黒褐色土
SP19	L－6	円形	皿状	48 × 43 × 28	黒褐色土	SP39	H－2	円形か	円筒形	50 × 〈32〉 × 79	黒褐色土
SP20	L－6	楕円形	円筒形	52 × 40 × 32	黒褐色土	〈 〉は残存値　単位＝cm					

第７項　遺構外出土遺物（第22図，第６表，写真図版10）

調査では，弥生時代から近世へかけて遺構に伴わない遺物が出土した。ここではそれらを報告する。

１～４は弥生土器の一群である。１は広口壺の口縁部片で，内外面及び口唇部に撚糸文を施文し，中期末～後期初頭に位置付けられる。２・３は壺・甕類とみられ，後期前葉～中葉の胴部片である。４は施文の原体は不明ながら，後期中葉～後葉の壺・甕類の胴部片と判断した。５～７は奈良・平安時代に帰属し，５は内面にヘラミガキ及び黒色処理が施された土師器の坏，６は須恵器の坏，７は須恵器の甕の頸部片である。８・９は瀬戸・美濃製品で近世に比定される。８は天目茶碗の底部片，９は長石釉を全面に施した志野丸皿の口縁部片であり，天目茶碗の高台径は小さいことから丸皿と共に17世紀前葉とした。10は肥前系磁器の染付碗で，外面に網目文が確認され，18世紀の所産である。11はチャートの裂片で，意図的ではない微細な剥離痕が認められる。縄文時代の遺物である可能性が高いが，今回の調査では縄文土器片は得られていないため時期不明としておく。



第 22 図　遺構外出土遺物

第５表　出土遺物観察表（１）

遺構	遺物番号	器種	計測値(cm) 口径・底径・器高	成・整形技法，特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	出土位置
SB01	1	土師質土器 皿	―・―・〈1.7〉	体部片。ロクロ成形。器壁は薄く，体部は直線的に立ち上がる。外面下端ナデ。15 世紀後半。	①白色粒・黒色粒多量，雲母少量 ②普通 ③にぶい黄橙色 (10YR6/3)	P1 底面
	2	鉄製品 不明	長さ〈3.1〉，幅 0.8，厚さ 0.4，重さ〈3.4〉g。 先端部欠損。先端へ向け僅かに細くなる。基部は折れ曲る。			P1
SB02	1	土師質土器 皿	(10.5)・―・〈2.2〉	口縁部～体部片。ロクロ成形。器壁が薄く硬質で体部は内湾しながら立ち上がる。外面下端ナデ。17世紀前葉。	①長石・石英・白色粒多量，赤褐色粒少量 ②良好 ③橙色 (7.5YR7/6)	P4
	2	石製品 砥石	長さ〈6.9〉，幅 2.2，厚さ 1.1，重さ〈22.1〉g。 ほぼ完形。端部を僅かに欠損する。表裏両側面をよく使い込む。凝灰岩製。			P2
SK01	1	古瀬戸 祖母懐茶壷	―・―・〈4.9〉	胴部片。外面に鉄釉。後期様式。15世紀後半。	①石英・白色粒中量 ②普通 ③外：にぶい赤褐色 (5YR4/3) 内：灰褐色 (5YR5/2)	底上 11 cm
	2	土師質土器 鍋	―・―・〈2.1〉	体部片。外面に煤付着。	①長石・石英・白色粒多量，雲母中量 ②普通 ③にぶい黄褐色 (10YR4/3)	覆土
SK03	1	土師質土器 皿	8.3・3.6・2.2	3/4 存。ロクロ成形。器壁は薄く，体部は内湾しながら立ち上がる。口唇直下の外面が沈線状に窪む。内底面横ナデ。内外面煤付着。17 世紀前葉。	①長石・石英・白色粒・黒色粒多量，雲母中量 ②良好 ③にぶい黄橙色 (10YR6/4)	底上 22 cm
SK10	1	土師質土器 皿	―・(3.4)・〈0.6〉	底部片。ロクロ成形。器壁は薄い。18 世紀。	①金雲母・白色粒・黒色粒多量 ②不良 ③にぶい黄橙色 (10YR7/4)	覆土
	2	土師質土器 鍋	―・―・〈4.1〉	体部片。外面に煤付着。18 世紀。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②良好 ③明赤褐色 (5YR5/6)	覆土
SK37	1	石製品 砥石	長さ〈9.0〉，幅〈6.4〉，厚さ 2.5，重さ〈185.1〉g。 破片。面取りされ，擦られていることから砥石と判断した。砂岩製。			覆土
SK16	1	土師質土器 壺	―・―・〈2.0〉	胴部片。ロクロ成形か。肩部とみられる。内外面ナデ。	①長石・石英・黒色粒・赤褐色粒多量 ②普通 ③にぶい橙色 (7.5YR6/4)	覆土
SK17	1	土師質土器 壺	―・―・〈2.4〉	口縁部片。ロクロ成形。口唇部は上方につまみ上げられる。	①長石・石英・雲母・白色粒・黒色粒多量 ②普通 ③褐色 (7.5YR4/6)	覆土
SD01	1	土師質土器 皿	―・(5.6)・〈3.2〉	1/5 存。ロクロ成形。内面に僅かながら煤付着。15 世紀後半。	①長石・石英・雲母・白色粒・赤褐色粒中量 ②普通 ③灰黄褐色 (10YR5/2)	底上 5 cm
	2	土師質土器 皿	(9.1)・―・〈1.4〉	口縁部片。ロクロ成形。器壁は薄く，口唇直下の外面が沈線状に窪む。17 世紀前葉。	①長石・石英・雲母・白色粒・黒色粒中量 ②良好 ③にぶい黄橙色 (10R7/3)	H-6 グリッド 上層
	3	土師質土器 擂鉢	―・―・〈3.6〉	体部片。細かい擂目が僅かに残存する。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②普通 ③明赤褐色 (5YR5/6)	H-6 グリッド 上層
	4	土師質土器 内耳鍋	―・―・〈3.8〉	体部片。耳部付近とみられ外面に押されている。内外面ヨコナデ。外面煤付着。15 世紀後半。	①長石・石英・雲母・白色粒・黒色粒多量 ②普通 ③外：灰黄褐色 (10YR4/2) 内：浅黄橙色 (10YR8/3)	底上 5 cm
	5	石製品 不明	長さ〈1.8〉，幅〈1.3〉，厚さ 0.7，重さ〈6.9〉g。 破片。二辺の端部が残存し，外面は平滑に擦られている。砂岩製。			H-5 グリッド
	6	石製品 砥石	長さ〈18.4〉，幅 12.8，厚さ 11.1，重さ〈3,200.0〉g。 2/3 存。面的な擦痕が認められ，沈線状の研跡が残る。被熱。安山岩製。			底上 17 cm
	7	石製品 砥石	長さ 24.6，幅 21.0，厚さ 9.0，重さ 4,000.0 g。 完形。部分的に擦痕が認められる。安山岩製か。			底上 24 cm
	8	石製品 砥石	長さ〈12.7〉，幅 11.7，厚さ 6.1，重さ〈1,040.0〉g。 2/3 存。部分的に擦痕が認められ，先端は叩かれている。被熱。安山岩製か。			底上 30 cm
	9	石製品 不明	高さ〈12.0〉，幅〈28.2〉，厚さ〈14.3〉，重さ〈3,220.0〉g。 破片。石塔の一部か，底面は敲打により整形される。全体に風化している。被熱。花崗岩製。			底上 24 cm
SK04	1	鉄製品 釘	長さ〈3.3〉，幅 0.9，厚さ 0.4，重さ〈2.3〉g。 1/2 存。角釘で先端が欠損する。			覆土
SK23	1	瀬戸・美濃 輪禿皿	(13.0)・(6.2)・2.7	1/6 存。ロクロ成形。体部上半内面に灰釉を施し，見込と畳付の釉は拭われている。17 世紀前葉。	①白色粒中量 ②良好 ③オリーブ黄色 (5Y6/3)	底上 36 cm
	2	鉄製品 釘	長さ〈4.9〉，幅 0.7，厚さ 0.4，重さ〈4.1〉g。 2/3 存。角釘とみられ，先端が折れ曲り欠損する。			底上 18 cm

第６表　出土遺物観察表（２）

遺構	遺物番号	器種	計測値(cm) 口径・底径・器高	成・整形技法，特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	出土位置
遺構外	1	弥生土器 広口壺	―・―・〈1.5〉	口縁部片。撚糸文Ｒ（ヨコ）を内外面及び口唇部に横位に施文する。中期末～後期初頭。	①白色粒多量，雲母微量 ②普通 ③暗褐色(10YR3/4)	SK39
	2	弥生土器 壺・甕類	―・―・〈6.0〉	胴部片。単節縄文LR（ヨコ・ナナメ）を施文する。後期前葉～中葉。	①長石・石英・雲母・白色粒多量 ②普通 ③灰黄褐色(10YR5/2)	H-3 グリッド
	3	弥生土器 壺・甕類	―・―・〈2.6〉	胴部片。単節縄文LR(ヨコ)の結節回転文を施す。後期前葉～中葉。	①石英・白色粒多量 ②普通 ③にぶい黄橙色(10YR7/4)	SK16
	4	弥生土器 壺・甕類	―・―・〈3.0〉	胴部片。撚糸文とみえるものの原体は不明である。後期中葉～後葉。	①長石・石英・白色粒多量 ②普通 ③黒褐色(10YR3/2)	SK01
	5	土師器 坏	―・(7.3)・〈0.9〉	体部～底部片。ロクロ成形。体部外面下端手持ちヘラケズリ。内面ヘラミガキ及び黒色処理。底部回転糸切り後回転ヘラケズリ。	①石英・白色粒中量 ②普通 ③外：灰黄褐色(10YR6/2)　内：黒色(10YR1.7/1)	SK16
	6	須恵器 坏	―・―・〈2.0〉	口縁部片。ロクロ成形。	①長石・石英・白色粒多量 ②還元堅緻 ③灰色(7.5Y5/1)	SK03
	7	須恵器 甕	―・―・〈6.8〉	頸部片。外面の上部にナデ，下部に叩きが施されている。	①石英・白雲母・白色粒多量 ②普通 ③褐灰色(10YR4/1)	H-2 グリッド
	8	瀬戸・美濃 天目茶碗	―・―・〈1.4〉	底部片。高台径は小さく露胎とし，見込に鉄釉が認められる。17 世紀前葉。	①石英・白雲母・白色粒多量 ②普通 ③褐灰色(10YR4/1)	K-6 グリッド
	9	瀬戸・美濃 志野丸皿	―・―・〈1.7〉	口縁部片。全面にややくすんだ長石釉が施される。17 世紀前葉。	①石英・白雲母・白色粒多量 ②普通 ③灰白色(2.5Y8/1)	K-6 グリッド
	10	肥前系 染付碗	―・―・〈3.8〉	口縁部～体部片。体部外面網目文。口縁直下の内面に圏線を施す。18 世紀。	①石英・白雲母・白色粒多量 ②普通 ③灰白色(N8/)	SD01
	11	裂片	長さ 2.9，幅〈4.4〉，厚さ 0.8，重さ〈14.0〉g。裂片。意図的ではない微細な剥離痕が認められる。 時期不明としたが縄文時代の所産である可能性が高い。チャート。			SK07

第７表　出土遺物集計表

遺構＼種別		弥生	古代						中・近世														時期不明			合計
		土器	土師器			須恵器			古瀬戸	瀬戸・美濃				肥前	土師質土器			石製品		鉄製品			土器	チャート	メノウ	
		壺・甕	坏	甕	不明	坏	甕	不明	祖母懐茶壺	天目茶碗	輪禿皿	志野皿	灰釉碗	染付碗	皿	鍋	壺	擂鉢	砥石	不明	釘	不明	不明	裂片	石核礫片	
掘立柱建物跡	SB01			3											1							1			2	7
	SB02														1				1							2
方形竪穴遺構	SK01	3							1							2							1			7
	SK03		1			1									1											3
	SK06		1																							1
	SK10				2										1	1										4
	SK37		1	1															1							3
地下式坑	SK16	2	1	1												2	1									7
	SK17	1		1													1									3
溝	SD01	1	5	1		1		1					1	1	2	1		1	3	2					2	22
土坑	SK04																				1					1
	SK07																							1		1
	SK22	1																					1			2
	SK23										1										1					2
	SK24			1												3										4
	SK33			1																						1
	SK34					1																				1
	SK35															2										2
	SK39	1																								1
	SK40		1																							1
H-2 グリッド							1								1								1			3
H-3 グリッド		2																								2
K-6 グリッド										1		1														2
合　計		11	10	9	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	7	11	2	1	5	2	2	1	3	1	4	82

第４章　総括

第１節　遺跡の時期と土地利用の変遷

調査は，中世城館跡として周知されている石沢館跡の北東端において実施され，中・近世の遺構群と遺物が検出された。その他弥生時代中期末～後期初頭を最古としつつ，弥生時代後期，奈良・平安時代の土器片が出土しているものの遺構は確認されていない。しかし，西側に展開する石沢台遺跡では奈良・平安時代の集落跡が認められていることから，中世を遡る人々の活動範囲にあったことを示している。

調査地の現況は店舗跡地のため平坦な地形になっていたが，旧地形は南の現道下に小支谷が存在し，これへ向け北から南へ傾斜していることが明らかになった。この地形に起因するものか，遺構は調査区の北側半分に偏在する傾向にあり，掘立柱建物跡，方形竪穴遺構，地下式坑，溝，土坑，ピットが重層的に構築されている。

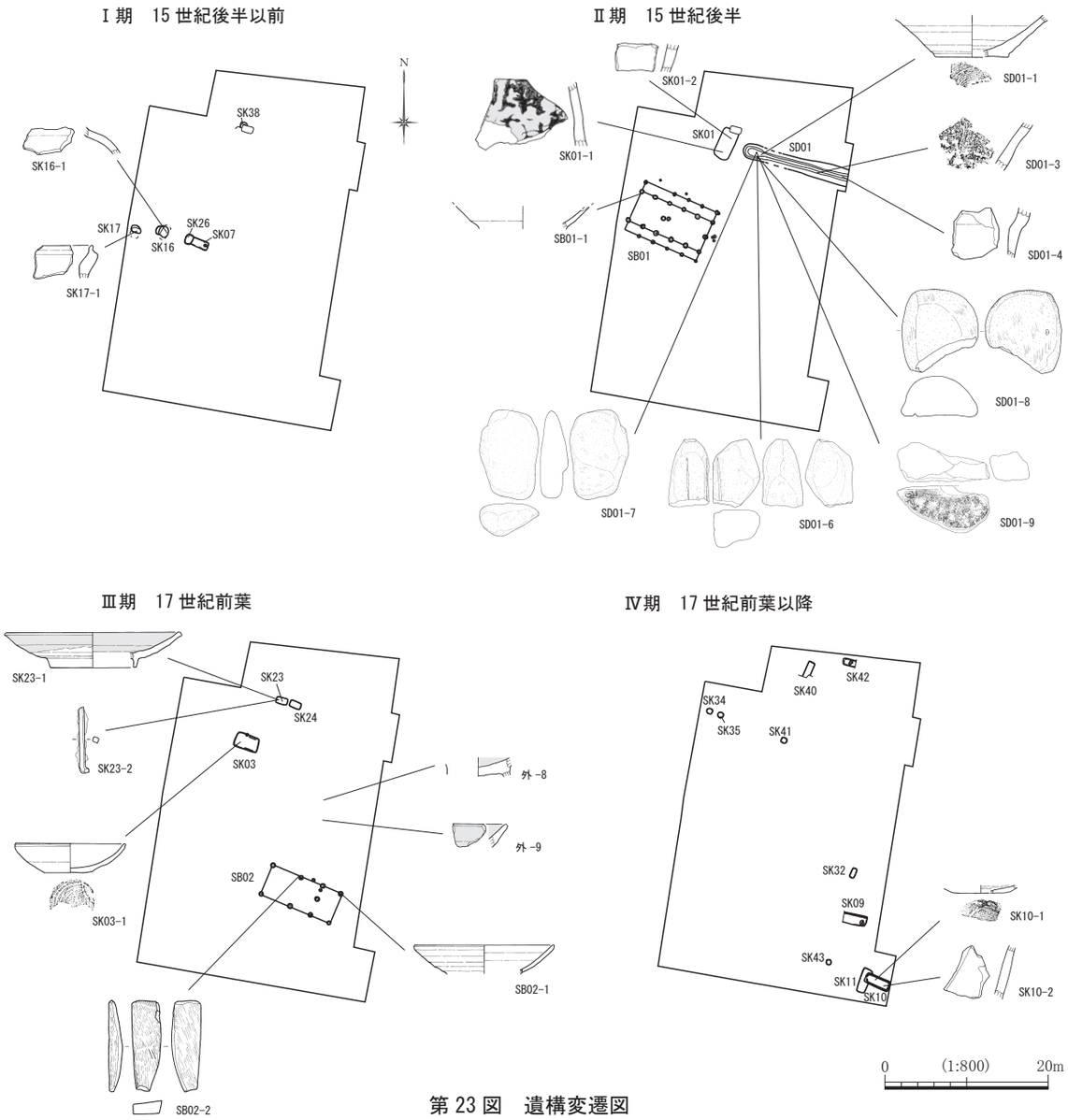
では，それら遺構について年代観を与えつつ，本調査区における土地利用の変遷をみていくことにする。ただし，中・近世の帰属と考えられる遺物は37点であるが，時期を確定できるものは少なく，陶磁器は僅かに６点であった。出土品のみでの時期決定は難しいことから，遺構の重複関係や，形態・覆土の状況を加味しながら検討していきたい。

まず，時期を明らかにできそうな遺物としては，SD01の底面近くから出土した土師質土器の皿（SD01-１）と鍋（SD01-４）がある。１の皿の体部は直線的に立ち上がり，４の鍋はいわゆるバケツ型で共に15世紀後半に位置付けた。SD01は，東西方向に構築されたもので，上端幅1.70～2.20m，下端幅0.25～0.85m，深さ0.80m，断面は逆台形である。規模は相違するものの西100mにおいて実施された，石沢台遺跡第３次調査発見の15世紀代に比定されている堀跡と同形態であり，SD01は15世紀後半とみて大過ないと考えられる。このSD01-１と同様の土師質土器皿の細片が，SB01P１の底面から出土している（SB01-１）。１点のみで時期を決定するのは危険といえようが，この遺物を重視するとSB01も15世紀後半の可能性は高い。SB01は，桁行５間，梁行２間の東西棟建物で，北と南の二面に廂が伴う。各柱穴の掘り方は円形で，等間隔に柱が配置されるなど一見古代に帰属する建物跡のような印象を受け，一般に戦国時代後半の城館跡で確認される根絡みや地中梁を伴う長楕円形の柱掘り方とは異なっていた。一方，建物の棟方向はSD01とほぼ同じくする。これらと同時期に比定される遺物としては，SK01から出土した祖母懐茶壺の胴部片があり，古瀬戸後期様式の製品と判断した。祖母懐茶壺は伝世するのでSK01の機能時期を示しているとするには不安定な要素もあるが，SK01は西進するSD01が止まる位置に構築されていることを考慮すると，SD01と有機的に関わる遺構とみた方が自然であろう。

次に16世紀代の遺物は得られておらず，SK23から出土した瀬戸・美濃製品の輪禿皿が17世紀前葉に比定される。SK24も形態・規模，覆土も同じでありこの時期の所産とした。また，SK03の土師質土器皿（SK03-１）は，器壁は薄く体部は内湾しながら立ち上がり，口縁直下が沈線状に窪んでいる。容量があることから17世紀前葉としておく。これと同形態の皿はSD01の上層からも発見されている（SD01-２）。SB02のP４より出土した土師質土器皿（SB02-１）は，焼成が良好で器壁は薄く，SK03-１とは若干の時間差があると捉えられるが大きく17世紀前葉として扱った。さらに，SB02近くのK－６グリッドでは17世紀前葉の瀬戸・美濃製の天目茶碗（遺構外-８），志野丸皿（遺構外-９）が採取されている。

SK10からは土師質土器の皿（SK10-１）と鍋（SK10-２）が出土，いずれも細片のため時期の決定は難しいが，18世紀とみられ，本遺構の覆土は薄く伴う資料と判断した。これと形態及び覆土を同じくするSK09もほぼ同時期といえる。

このように発掘された遺構群は，出土遺物に基づくと15世紀後半，17世紀前葉，18世紀に比定される。



第 23 図　遺構変遷図

さらに，遺構の多くは重なり合っており，おぼろげながら帰属時期がうかがわれる。これらを参考としつつ時期決定が可能な遺構のみで，４時期に大別したのが第23図である。特に掘立柱建物跡のSB01と方形竪穴遺構のSK01を基軸に新旧関係をみると，天井部が残存するため地下式坑の名称を用いたSK16・17，土坑のSK07・26・38が古く，15世紀後半以前に一括してⅠ期とした。Ⅱ期はSB01，SD01，SK01などで15世紀後半である。Ⅲ期は17世紀前葉をあて，SB02，方形竪穴遺構のSK03，土坑のSK23・24で構成される。Ⅳ期は17世紀前葉以降である。規模から方形竪穴遺構にしたもののSK01・03・06・37とは異質な18世紀のSK09・10と，SK10と重複し，同形態で若干先行するSK11を幅を持たせてこの時期とした。また，時期の細分はできなかったが，円筒形の土坑であるSK34・35・41・43，これと同じ覆土のSK32・40・42も近世遺構と認識し，17世紀前葉以降に比定している。

なお，SB01より新しいSK30・36をはじめ，多くの遺構に年代が与えられていない。第23図の大別では16世紀代が空白期になっているが，検出状況から遺構が構築されなかったとは考えにくく，年代が与えられなかった遺構には16世紀代やⅠ～Ⅳ期に帰属するものも含まれ，そのなかでいくつかの小期に分けられることは明らかである。そして，Ⅱ・Ⅲ期では掘立柱建物跡と方形竪穴遺構，あるいは大型の方形土坑がセットになって機能していたと考えられる。

第２節　調査区の性格

調査区は15世紀後半～ 18世紀へかけて営まれた遺跡と理解されるが，ここで問題となるのはその性格である。これを解明するにあたっての手がかりとして立地を確認しておきたい。

現在の地形をみると，調査区の南際を東西に走る現道に沿ってその南側はＬ字状に窪んでおり，さらに南側は僅かながら高くなっている（写真１）。この状況は目視において堀の存在を想像するには十分な地形で，西に位置する石沢台遺跡第３次調査で発掘された堀が東進した場合この掘り込みと接続するとみて，堀の埋蔵が指摘されてきた（第２図）。ところが今回の調査ではこの部分に小支谷が入り込む旧地形が明らかになり，本来堀が構築される旧表土の上には厚い堆積が確認されるなど（第５図），現地表面で堀の痕跡が認められるものかとの基本的な疑問が生じた。これにより堀は存在せず代わって浅い谷地形になる可能性がでてきている。ただし，区画を意図したものであれば，旧表土から浅い溝を掘り込むことや，南側立ち上がりの自然地形に手を加えることはあり得る。改めて遺構の分布をみると，調査区の北部分で発掘されたSD01と小支谷の間に密集する傾向を示している。SD01の用途は，土塁を伴わず規模からは防御よりも区画のための遺構と考えられること，各遺構の軸線はSD01と同一であることから，SD01と小支谷とで区画された様相が浮かび上がる。東側の現道下には南の小場城から北の部垂城への街道が通っていたと考えられており（『続 図説 茨城の城郭』），重要な視点になる。本調査区の遺構はこのような地形的環境のなかで構築されているのである。

次に各遺構をみると，今回の調査において特徴的なのは方形竪穴遺構の検出である。方形竪穴遺構は，「方形竪穴建物」・「方形竪穴状遺構」・「竪穴遺構」などと各報告書に表記される半地下式の建物跡で，一般に中軸線上に棟持柱を伴う構造である。住居，工房，貯蔵庫，墓に関わる施設などとする説が提示され，「奥大道」と想定される古道沿に形成された，街道集落の「市庭」や「宿」とみられる栃木県下野市の下古舘遺跡では，100基以上の方形竪穴遺構が調査されている。下古館遺跡においては，平面形態や出入口の位置，柱位置から分類されており，本調査では主体的なピットや火処の検出がないため方形竪穴建物の用語をさけ方形竪穴遺構としたものであるが，この分類に従うと無柱のＨ類に相当するものが多い。しかも，本書では長軸が2.5ｍを超えるものを方形竪穴遺構としたが，それに満たない大型の方形土坑を含め，壁下に壁溝状の小溝が認められているものもある。おそらく壁を造りだしたものであろう。SK13やSK15の大型方形土坑は壁溝状の小溝を伴う事例であり，SK08・SK15では底面が貼られていた。千葉県成田市の西下遺跡では，約２ｍ四方の方形竪穴遺構が検出され，床面に炉が造られて壁溝が確認されている。残念なが

写真１　調査区南の現況（東から）

ら今回の調査では，方形竪穴遺構の機能を言及できる資料は得られていないが，少なくとも大型の方形土坑と共に建物跡であった可能性は高い。

出土品をみると，中・近世とした遺物は37点で遺構数の割に少ない。しかも貿易陶磁は確認できず，貧弱な様相である。資料数が僅かで統計的な信頼性は低いが，傾向を知る手がかりとして数値を挙げると，15世紀後半～ 17世紀前半の陶器・土器は23点を数え，陶器は17％，土師質土器は83％であった。土師質土器は皿・鍋・壺・擂鉢で構成され，鍋が全体の43％で最も多く，次いで皿の26％，壺の９％，擂鉢の４％となる。茶陶を含み，土師質土器皿は出土したものの，全体としては煮炊具と調理具で過半数近くを占めている。また，大型の砥石が含まれていることも特筆されよう。

今回検出された遺構に，西側において常陸大宮市教育委員会が実施した試掘調査の成果を踏まえると，調査面積の割には中世遺構の分布密度は希薄なようで，遺物の少なさもそれに比例しているようである。そのなかで少なくとも15世紀後半には，区画された空間に東西方向を基調としつつ，掘立柱建物跡と方形竪穴遺構，大型の方形土坑が関わりながら機能していた。掘立柱建物跡は規格性のある構造ではあるが，遺物からみた階層は高くはなく，これを城館内の建物とするのは難しい。ただ，一定量の土師質土器皿が出土していることを考慮し，農民層の遺構ではないと判断した。そこで注目されるのは調査区の東に通っていたとされる街道である。市庭及び宿などの街道集落跡として評価されている下古館遺跡では，方形竪穴遺構が特徴的な遺構であることを考えると示唆的である。また，千葉県柏市の中馬場遺跡では，中世城館跡の外側に形成された屋敷地からなる集落が報告されており，区画内に掘立柱建物跡と，ここでは方形竪穴遺構ではなく，方形竪穴遺構から機能の変遷が想定され貯蔵庫と考えられている地下式坑が組み合わせで機能していた。街道に影響を受けた宿跡に位置付けられるなど類似点が指摘できる。

これらを併せ調査区の性格を考えると，街道と有機的に関わり，小規模な屋敷や工房を内在した集落の可能性が高まる。調査区の遺構群と石沢館との関係は明らかにできないが，現時点では15世紀後半～17世紀前葉へかけ重層的に営まれた，石沢館外縁の宿的な集落跡としておきたい。

引用・参考文献

茨城県考古学協会　2011 『茨城中世考古学の最前線～編年と基準資料～』

茨城城郭研究会　2017 『続 図説 茨城の城郭』 国書刊行会

瓜連町史編さん委員会　1986 『瓜連町史』

大宮町教育委員会　2004『上宿上坪遺跡』

大宮町史編さん委員会 1977 『大宮町史』

柏市史編さん委員会　2019 『柏市史』原始古代中世 考古資料

唐澤考古会　2010 『唐澤考古』第29号 特集飛山城と中世竪穴建物

全国シンポジウム「中世窯業の諸相」実行委員会　2005 『中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年－』

常陸大宮市教育委員会　日考研茨城　2007 『鷹巣原遺跡』

常陸大宮市教育委員会　2013 『赤岩遺跡Ⅱ　三美中道遺跡Ⅰ』

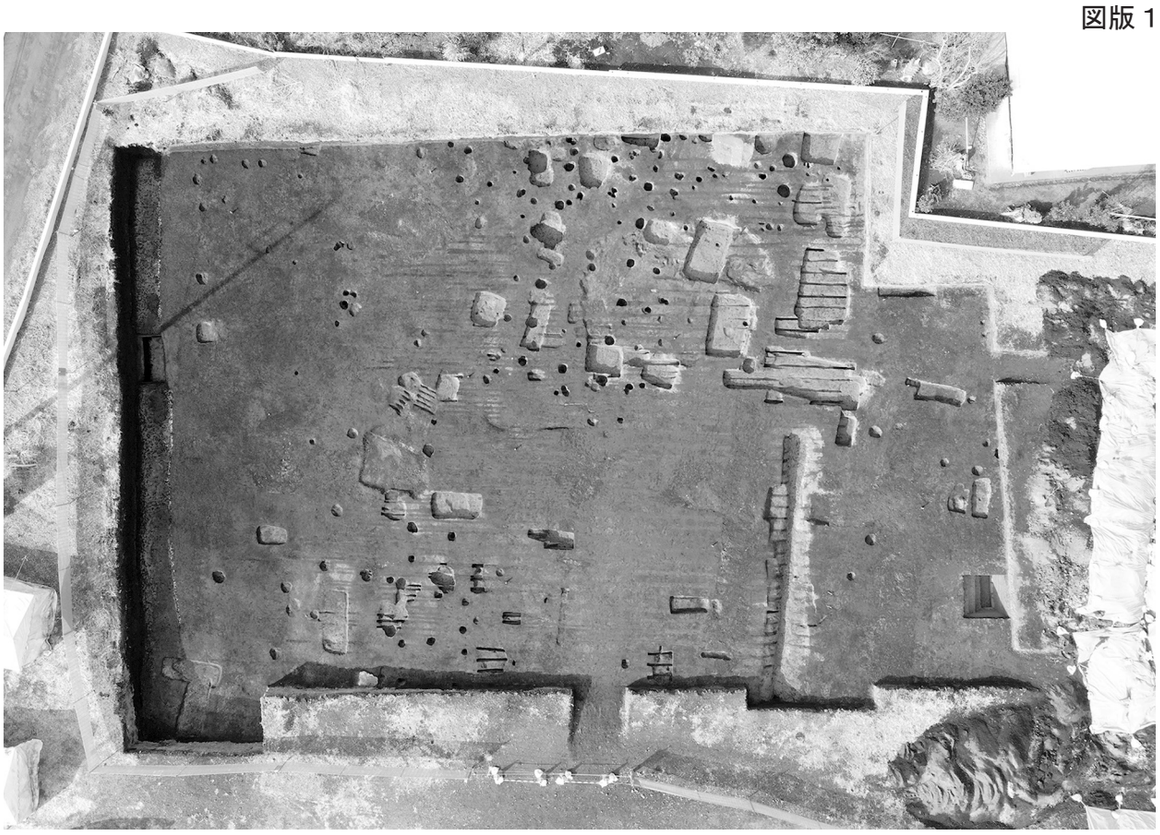
常陸大宮市教育委員会　2013 『石沢台遺跡』

常陸大宮市教育委員会　2016 『石沢台遺跡Ⅱ』

常陸大宮市教育委員会　2016 『石沢台遺跡Ⅲ』

常陸大宮市教育委員会　2018 『常陸大宮市史研究』第１号

写 真 図 版



調査区　全景（上空から）

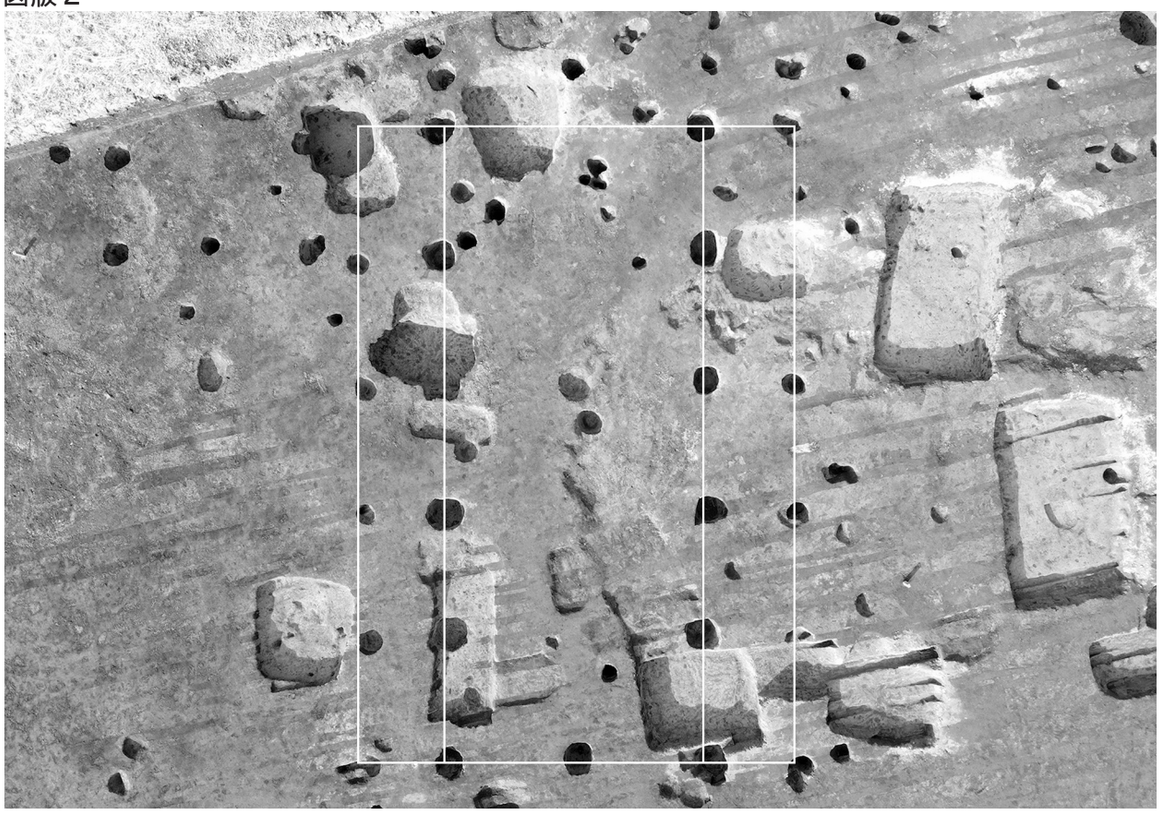
同　全景（上空から西を望む）

同　調査前現況（南西から）

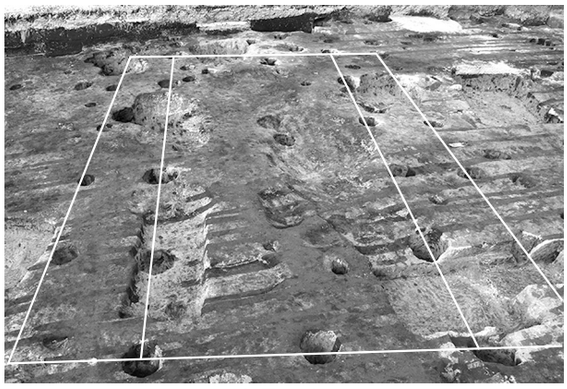
TP01　基本堆積土層（北から）

TP02　基本堆積土層（南から）

図版２



SB01　全景（上空から）

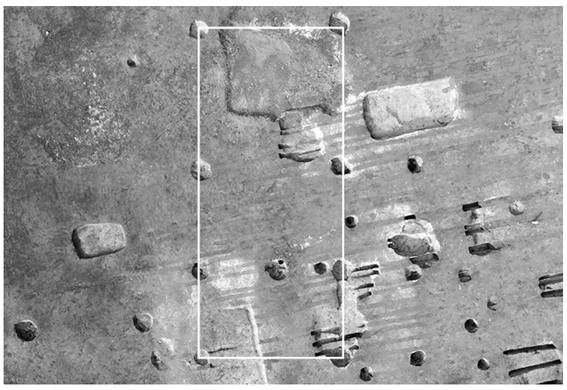


同　全景（東から）

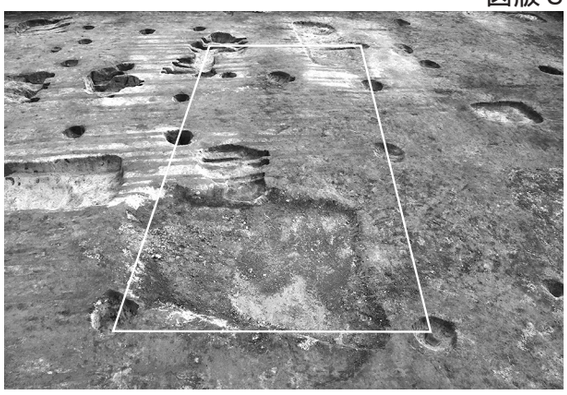
同　P1　土層断面（北から）

同　P8　土層断面（南から）

同　P14　土層断面（南から）

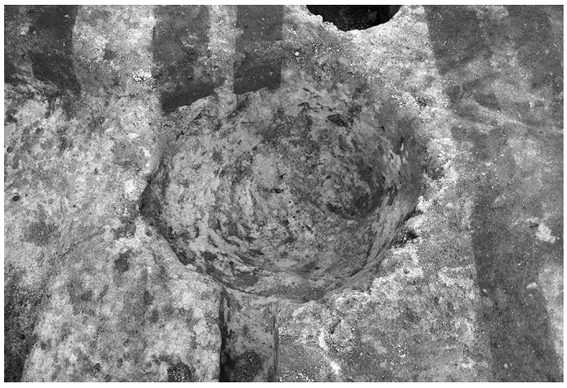


SB02　全景（上空から）



同　全景（西から）

同　P1　土層断面（北から）



同　P3　近景（北から）

SK01　全景（南から）

同　遺物出土近景（西から）

SK02・28　全景（南から）

SK03　全景（東から）

図版４

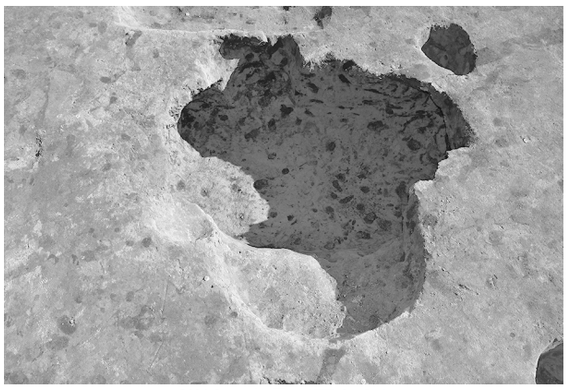
SK03　遺物出土近景（東から）

SK06　全景（東から）

SK09　全景（西から）

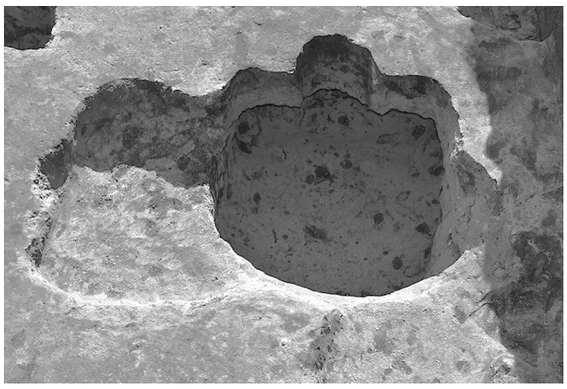
SK10・11　全景（西から）

SK37　全景（東から）



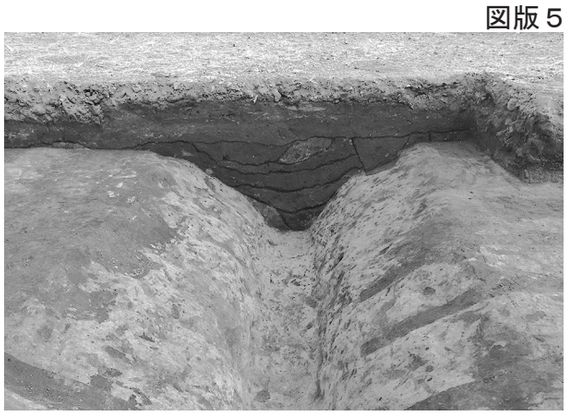
SK16　全景（西から）

同　土層断面（南から）



SK17・30　全景（北から）

SD01　全景（東から）



同　土層断面（西から）

同　石製品　出土状況（北から）

SK04・05・27　全景（南から）

SK07　全景（西から）

SK08　全景（南から）

同　土層断面（南から）

図版６

SK12　全景（北から）

SK13　全景（南から）

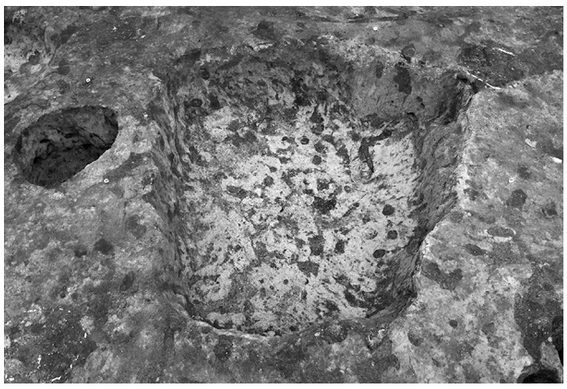
同　土層断面（南から）

SK14　全景（南東から）

SK15　全景（西から）

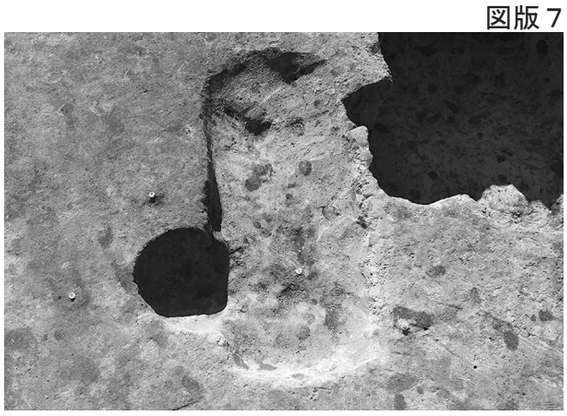
同　土層断面（南から）

SK18　全景（南から）



SK19・29　全景（東から）

SK17・20　全景（北から）



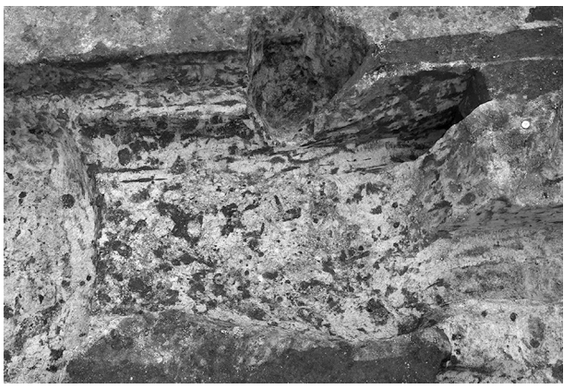
SK21　全景（北から）

SK22　全景（西から）

SK23・38　全景（西から）

SK23　遺物出土近景（南から）

SK24　全景（東から）



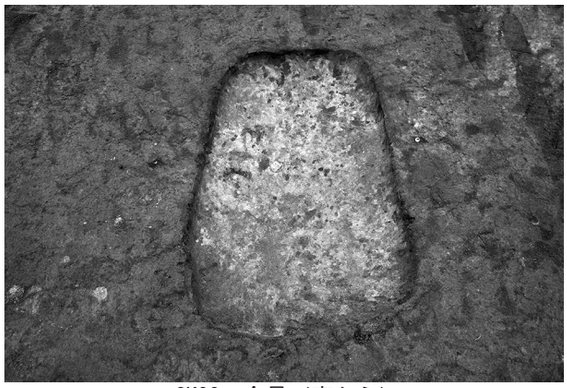
SK25　全景（東から）

SK26　全景（南から）

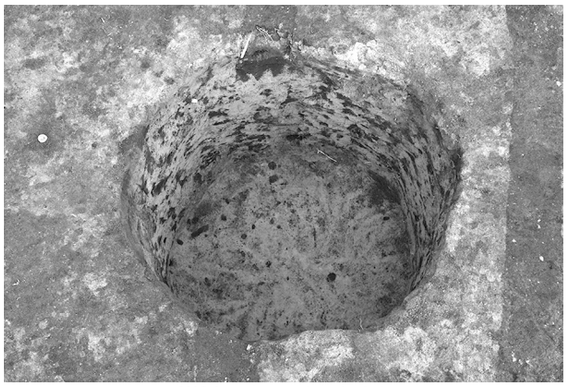
図版８

SK31　全景（東から）

SK32　全景（南から）

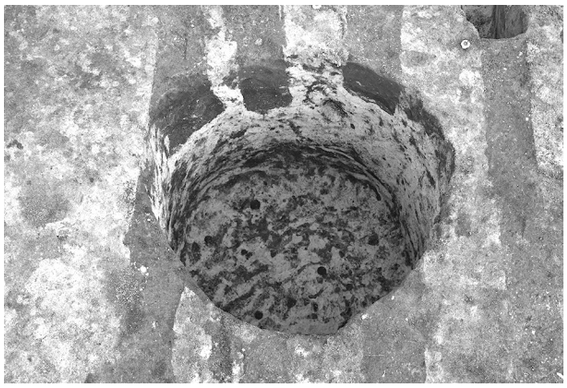


SK33　全景（南から）



SK34　全景（南から）

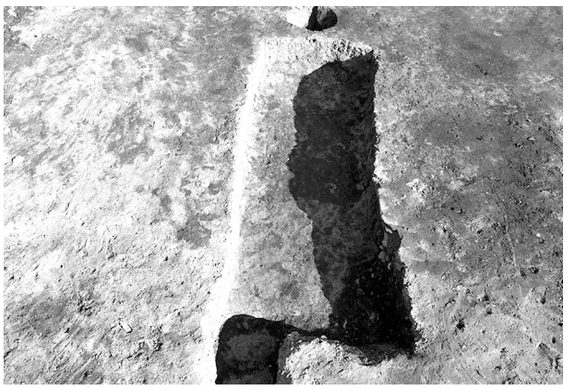
同　土層断面（南から）



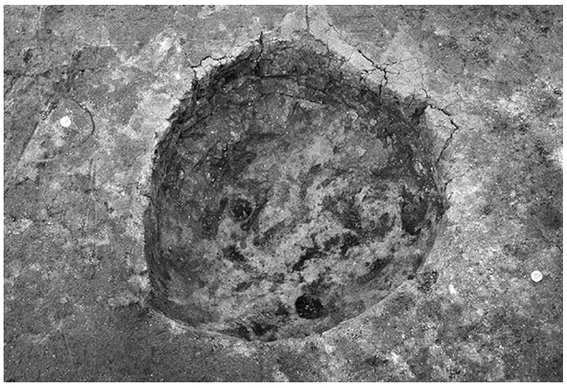
SK35　全景（南から）

SK36　全景（東から）

SK39・41　全景（東から）


SK40　全景（南から）

SK42　全景（北から）


SK43　全景（南から）

SP01 ～ 08　全景（西から）

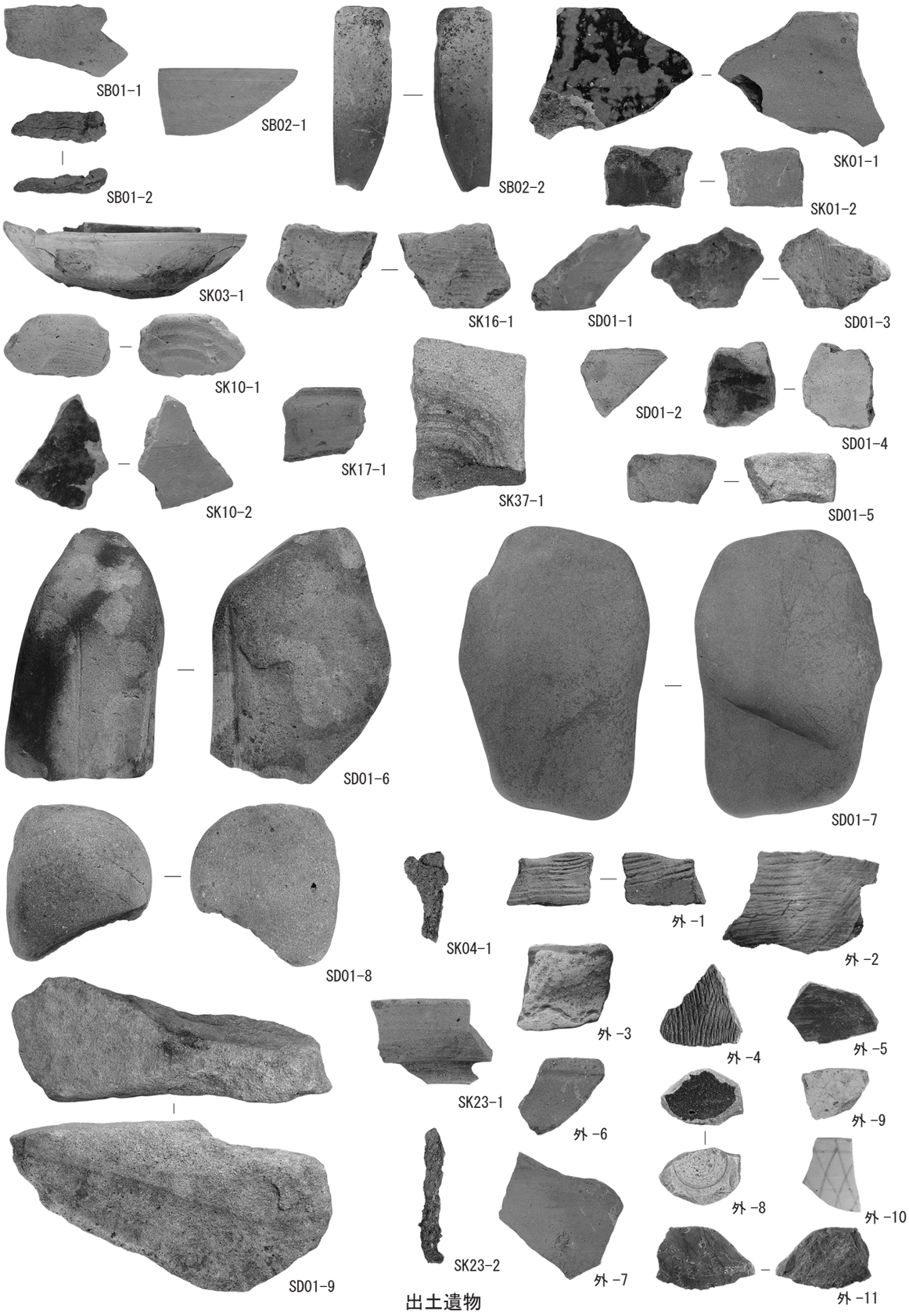
SP09 ～ 11・13・28 ～ 31　全景（西から）

SP24 ～ 33・36　全景（北から）

SP09・10　土層断面（東から）

SP31　土層断面（北から）

図版 10


SB01-1
SB02-1
SB02-2
SK01-1
SB01-2
SK01-2
SK03-1
SK16-1
SD01-1
SD01-3
SK10-1
SD01-2
SD01-4
SK17-1
SK37-1
SK10-2
SD01-5
SD01-6
SD01-7
SD01-8
SK04-1
外 -1
外 -2
外 -3
外 -4
外 -5
SK23-1
外 -6
外 -9
外 -8
外 -10
SD01-9
SK23-2
外 -7
外 -11

出土遺物

抄 録

ふりがな	いしざわだてあと
書名	石沢館跡
副書名	店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第34集
編著者名	間宮政光
編集機関	株式会社 地域文化財研究所　〒270-1327　千葉県印西市大森2596-9 TEL0476-42-7820
発行機関	常陸大宮市教育委員会　〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135-6 TEL0295-52-1111
発行年月日	2021年（令和3年）8月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
いしざわだてあと 石沢館跡	いばらきけん 茨城県 ひたちおおみやしいしざわ 常陸大宮市石沢 あざかじうち 字梶内 1685番， 1686番1， 1,687番1･3	08225	大155	36° 32′ 16.50″	140° 24′ 48.29″	20201214 ～ 20210126	1,078.9㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石沢館跡	城館跡	中・近世	掘立柱建物跡　2棟 方形竪穴遺構　8基 地下式坑　2基 溝　1条 土坑　33基 ピット　39基	弥生土器：壺・甕類 土師器：坏，甕 須恵器：坏，甕 古瀬戸：祖母懐茶壷 瀬戸・美濃：天目茶碗，輪禿皿 志野皿，灰釉碗 肥前系磁器：染付碗 土師質土器：皿，鍋，壺，擂鉢 石製品：砥石 鉄製品：釘 その他：チャート裂片， メノウ石核・礫片	調査区から検出された遺構群と石沢館跡の関係は明らかではない。 調査区の性格は小規模な屋敷地を内在し，東に位置したとされる街道と有機的に関わりながら主に15世紀後半～17世紀前半にかけて営まれた石沢館外縁の宿的な集落と考えられる。

要約

中世城館跡として周知されている石沢館跡の北東端において発掘調査を実施し，中・近世の遺構と遺物が検出された。

調査区の南には小支谷の存在が明らかとなり，各遺構は15世紀後半～18世紀にわたって構築されたもので，小支谷と溝により区画されたなかに掘立柱建物跡と方形竪穴遺構，あるいは大型の方形土坑がセットになって機能していた。

本書は長期保存を考慮し，すべて中性紙を使用しています。

【紙　質】

表紙	レザック 66	175kg
見返し	上質紙	70.5kg
扉・序・例言・目次・本文	書籍用紙	57.5kg
図版・抄録・奥付	マットコート	70.5kg

【印　刷】

オフセット印刷

印刷は巻頭図版カラー，本文・写真図版モノクロ

茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第 34 集

石沢館跡

店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

令和３年（2021）８月 27 日　印刷

令和３年（2021）８月 30 日　発行

編　集　株式会社 地域文化財研究所

発　行　常陸大宮市教育委員会

印　刷　株式会社 ライフ　℡ 0476-24-1564